巻頭言

わかることによって わからなくなる

龍村 仁（映画監督）

Jin TATSUMURA

映画『地球交響曲第三番』の出演者であり、20世紀最大の宇宙物理学者のひとりフリーマン・ダイソン博士が、こんなことを言っている。

「科学の本当の素晴らしさは、ひとつの自然現象が科学的に理解できたとき、その背後に、私たちがまだ科学的に理解していない謎が無数に存在していることに気付くこと、すなわち“わかることによって わからなくなる”ことにこそあるのだ。

自分は“わかっていない”と気付いたとき、人は必ず謙虚になる。と同時に、その謎をひとつでも解き明かしたい、という強い想いが生まれる。この、目先の利便や名誉にとらわれない無私の探究心こそが人類進化の原動力であり、太陽系第三惑星地球に38億年という歳月をかけてわれわれ人類のような“知性”を持つ生命体を生み出した“宇宙の意志”の現れなのかもしれない。

私は、いま私たちが持っているあらゆる科学的知識に照らし合わせてみて、この宇宙にはなんらかの“意志（ユニバーサル・マインド）”のようなものが存在する、と考えるほうがより科学的である、と思っている。

その宇宙の“意志（こころ）”のようなもののことを、人々は“神”と呼んでいるのかもしれない。

その意味で、ひとつの現象が科学的に理解できたとき、すべてがわかったように言い募るのは、科学者のとるべき態度ではないのだ」

私は彼のこの言葉を1996年、プリンストン高等学術研究所の研究室と、カナダの無人島・ハンソン島で聞いた。いまとなると本当に身につまされる話である。

私たちには、大地震や大津波がいつ、どこで、どんな規模で起こるのかについては、いまだほとんど科学的にはわかっていない。

38億年前、確率的にはありようのないような“偶然”の重なりの中で初めての生命を生み出し、何度もの大絶滅の危機を乗り越えて進化を続け、われわれ人類のような種を生み出し、多種多様な生命と共にいまも生かし続けている地球（ガイア）の精妙かつ超高度な生命システムについても、まだほとんど科学的には理解していない。

原子力は、150億年前、時間も空間もない無の虚空から、突如起こった大爆発によってこの物質宇宙を生み出した宇宙根源の力（エネルギー）の源である。その力の片鱗を、ほんの少し科学的に理解しただけで、その力を制御できると言い募り、自分たちだけの利便と安楽を得るために使おうとした私たち人類の未熟さが、いまの未曾有の苦難を生み出している。

私たちは“わかっていない”ことがわかっていなかったのだ。

それでも希望はある。フリーマンはこう言っている。

「人間の想像力は絵空事ではない。人は心に描いたことをいつか必ず現実にする可能性を秘めている。そのために、“神”は人間に想像力を与えたのだ」

わかっていなかったことがわかったいま、私たちが心にどんな地球（ガイア）の未来を描くかによって現実の未来が変わってくるのかもしれない。

「動機善なりや、私心なかりしか」

稲盛和夫理事長インタビュー

聞き手　吉川左紀子（こころの未来研究センター長）
Sakiko YOSHIKAWA
鎌田東二（こころの未来研究センター教授）
Toji KAMATA
平石　界（こころの未来研究センター助教）
Kai HIRAISHI

Kazuo INAMORI

稲盛和夫（いなもり・かずお）　公益財団法人稲盛財団理事長。1932年鹿児島市生まれ。鹿児島大学工学部卒業。1959年京都セラミック株式会社（現、京セラ株式会社）設立。社長、会長をへて1997年より名誉会長。1984年第二電電株式会社（現、KDDI株式会社）を設立し会長に就任、2001年より最高顧問。2010年日本航空株式会社会長に就任。1984年財団法人稲盛財団を設立し京都賞を創設。また経営塾「盛和塾」の塾長として若手経営者を育成している。1997年には臨済宗妙心寺派円福寺で得度を受けた。著書に『稲盛和夫の実学』『生き方』『成功への情熱』『稲盛和夫の哲学』『ガキの自叙伝』『敬天愛人』『人を生かす』『ど真剣に生きる』『アメーバ経営』ほか多数。

リーダーとしての人間性

吉川　早いもので、センターができて今年の４月で５年目に入りました。今までのことを振り返って、これからどういう方向でセンターの研究活動を進めていくべきなのか、皆で考えているところです。

センターは、からだ、きずな、生き方という３つの領域を中心に研究を行っていますが、研究の進めかたについては２つの課題があります。ひとつは、専門の違う研究者間の交流、もうひとつは大学と社会とのつながりという面です。そうした中で、心理学や脳科学、宗教学など、「こころ」にかかわる研究者が現代社会

の中でどういう役割を果たしていくべきなのか、社会の中で貢献していくにはどうしたらいいか、そういったことをもっと考えていくようにしたいと思っています。

学術広報誌『こころの未来』も今回から少し趣を変えて、毎回テーマを決めて内容を構成することになり、平石助教が「徳ときずな」というテーマを提案しました。平石助教は進化心理学といって、人間のこころが長い進化の過程の中でどういうふうにつくられてきたのかということを、理論的に、あるいは実験的に考える先端分野の研究をしています。進化心理学を含めて、心理学の中で最近多くの研究者が関心を寄せているのが、信頼や協力、思いやりのような、利他的なこころの起源についてです。そうしたこころが人間の中にどのように備わっているのか、環境の中でどのように育まれるのかということが議論されています。宗教学や倫理学の中でも「徳」はとても重要な概念です。

そこで、ぜひ理事長に「徳」というテーマでお話を伺って、『こころの未来』に載せさせていただければと思いました。大変お忙しい中、インタビューをお引き受けいただき、ありがとうございます。

理事長のご著書の中に、人間には魂があって、魂を磨いていくことがとても大事だと書かれています。理事長が、人間にとって「徳」がとても大事であると実感されたエピソードやご経験について、お話を伺えればと思います。

稲盛　私は、セラミックスの研究開発をずっとやっておりました技術屋です。27歳のとき、自分の研究成果をベースに工業化を始めまして、それを見込んでくれた方々が集まって、京都セラミツク株式会社（現、京セラ株式会社）という会社をつくっていただいた。そのときから、研究者とか技術屋という枠を超えて、経営者という立場になってしまいました。

最初は28名という小さな所帯でしたが、一生懸命仕事をしているうちに、どんどん会社が大きくなり、社員も増えていったのです。そのとき、経営というのはどうすればいいのかということに大変悩みました。

会社経営で一番大事なことは、どうやって人を治めるかということです。これは会社経営だけではなくて、大学でも何でもそうだと思います。組織の長にとっては、組織の人たちをどうまとめて、どういうふうに経営していくかということが最大の課題だと思います。

そうすると、そういう人たちをまとめて引っ張っていくのに一番大事なことは何だろうか。私の場合には、最先端のセラミックスの研究、技術開発をやっておりましたので、まず自分の才能とか実績がすぐれていて、みんながそれに対して敬意を払ってくれることが大事です。

吉川左紀子センター長

しかし、そういうものをあまり理解しない一般の作業者の人たちをまとめて、組織として機能させていくためにはどうすればいいのか。そうすると、やっぱりリーダーとしての人間性がキーになってくるということに気がついたんです。この人の言っていることは正しい。だから、この人の指示に従ってやっていこうと組織の中にいる人たちが思うような状態をつくらなければだめです。

しからば、そういう組織の人たちがついてくる人間性はどういうものなのかというと、立派な「徳」を備えていることではないかと思います。

「徳」といっても、あまりにも漠然としています。私がまず考えたのは、みんなが信頼し尊敬してくれるには、人間のこころのベースにある良心が大切だということです。たとえば、人間のこころの中には「真我」と「自我」がある。「真我」は非常にピュアなこころ、他を思いやる優しいこころです。これは仏教でいうと「利他のこころ」ですね。一方、「自我」は利己に満ちたもの、つまりエゴです。自分さえよければいい。自分の損得や名誉、権威、地位を守ろうというふうに、己を中心にした考え方をする。その２つが人間のこころの中を占めていて、常に葛藤している。

「徳」の高い人、つまり、みんながついてくる人というのは、みんなを優しく包み込むような思いやりのこころ、自分が若干損をしても周囲の人を助けてあげる、守ってあげるという「利他」のこころをもっている人のことで、それが一番大事ではないか。そして、利他的な、美しいこころが常に自分のこころを支配するようにするためには、自分のこころを整えることが非常に大事だろうと思い至ったのです。逆に言いますと、利己的な、エゴに満ちた自分をなるべく抑えていくようにしなければ、周囲の人から信頼・尊敬される

京都セラミツク株式会社創業時のメンバー。後列左から 6 人目が稲盛和夫氏

ようにはならないと思ってきました。

一方、リーダーというのは、その集団がどっちへ向けばいいのか、何をすればいいのか、何をしたらいけないのかを判断しなければなりません。大学の場合には、学問の自由ということで、それほど強いリーダーシップはいらないのかもしれないし、また、ないほうがいいのかもしれません。けれども、そのためにまとまっていないというところがあるのではないかと思うんです。企業はやはり１つの方向に向かって進まなければなりませんから、そのためにも、みんなに尊敬され、信頼されることが大事です。

「動機善なりや、私心なかりしか」

稲盛　物を決めていくときに、「あの人が決めたんだから、われわれもついていこう」とみんなが思ってくれないといけないので、「動機善なりや、私心なかりしか」という言葉で自分を戒めています。「こういう方向に集団を引っ張っていこうと考えているけれども、その動機は善なりや」。「善」というのはまさに良心に基づいたものなのかどうかということです。さらに「私心なかりしか」。全体のために善きことをしようとしていて、それには自分のエゴが含まれていないのかということを、常に自分自身に問いながらやってきました。

それを一番強く意識したのは、「第二電電」（現、KDDI株式会社）を創業したときです。当時の電電公社（現、NTTグループ）が、明治以来、通信事業を政府の資金を使って官営事業として独占的にやってきた。強大な力を持っていたのですが、それが自由化されて、新規参入が可能になりました。

資本主義社会では健全な競争関係があって初めて正しい状態が生まれるわけです。独占で経営をやられたのでは、受益者である国民が不利になることはみんな知っていた。だから、通信事業の自由化で、競争をする会社が新しく出てくることを国民は強く願い、行政改革で自由化を提唱した有識者の人たちもそれを期待していたのですが、電電公社はあまりにも巨大です。各家庭まですでに電話線を引いている。当時、電話線を引くのでも、非常に高い金がかかったり、家庭で引こうと思っても順番待ちだったりして大変でした。そういうインフラを持った強大な電電公社に対抗しようと思ったって、できるわけがない。日本の大企業が束になってかかっても非常にリスキーだというので、いいことだと思ってもだれも手を挙げなかったんです。

当時、京セラは売上が年間3000億円ぐらいで、まだ京都の中堅企業でしかなかった。私は、だれも出なければこの独占体制は崩れないので、何としてもそれに挑戦してみたいと考え、名乗りを上げようと思ったんです。

もともと私は化学の専門で、通信についてはまったくの素人ですから、徒手空拳です。でも、どうしてもやらなければならないという志だけは非常に高かった。そのとき、「動機善なりや、私心なかりしか」、つまり、おまえは正しい競争状態をつくって、国民にも喜んでもらう、そういう社会をつくりたいと言っているけれども、本当にその動機は間違いがないのか。そこには、自分の売名だとか、一旗揚げて利益を得たいとかといった私心はないのかと、毎晩、仕事が終わってから自問自答していました。

半年ぐらい経って、まったく間違いがないと思って決心がついた。そこで、第二電電をつくると声を上げたのです。まわりの人はみんなびっくりして、「無手勝流で巨大な電電公社に挑戦するなんてドン・キホーテのようなものだ。やれるわけがないではないか」と言われたのです。

そのとき、戦後の経営者の中で若手の人たち、創業社長の方々や友人たち５、６名が、「稲盛さん、われわれもやるべきだと思ったけれども、どうしても勇気が出なかった。あんたがやるというなら応援するよ」と言って応援をしてくれることになったんです。結局、第二電電を興してみんなを引っ張っていくことになり、ソニーの盛田昭夫さんとか、ウシオ電機の牛尾治朗さん、セコムの飯田亮さんなどが続々と集まってくれて、

第二電電の前身、第二電電企画の設立パーティーで。右から、盛田昭夫ソニー会長、真藤恒電電公社総裁、稲盛氏、飯田亮セコム会長、牛尾治朗ウシオ電機会長、森山信吾第二電電企画社長（1984年 5 月31日、肩書は当時）

最終的には日本の大企業を含めて220社ぐらいが参画してくれました。

ただし、「稲盛さん、あんたが言い出しっぺだから、責任はあなたが取るんですよ」と言われました。もちろんそのつもりです。皆さんには迷惑はかけられない。だから、資本金だけ出してもらいますが、すべての責任は私が取りますということで始まったんです。

こころの中心に常に良心がある人

稲盛　中小企業を含めて、社員をまとめていくのにもリーダーの人間性が問われる。第二電電のような大きなプロジェクトをやるときに、何の保証もない中でみんなが賛同してくれるのも、やはり人間性だと思います。それが、先ほど言ったように、「徳」があるかないかだと思うのです。

「徳」というのは非常に高尚すぎて、私にそれほどの「徳」はありませんけれども、その場合には、世のため、人のためということがベースだったわけです。それはまさに私のこころの中の良心が強く、エゴが一般の人より少ない、そういう状態だったことが、みんなを引きつけたのだろうと思います。

私は理科系の人間ですから文学的なことは何もわかりませんが、「徳」というのはその人のこころの状態を表す言葉だろうと思います。

さっきから言いますように、良心というものを持っている。つまり優しい思いやりに満ちたこころですね。同時に、邪（よこし）まなこと、不正なことを忌み嫌い、どんなに自分にとって損であっても、正しいことを貫いていく。そういう、一面で強いものを兼ね備えた人を「徳の高い人」と言うのではないかと私自身は思っています。一言で言うと、こころの中心に常に良心がある人です。

吉川　理事長にとって、この人は人間としてすぐれた生き方をしているなとか、こういう人になりたいといったように、モデルになるような人や書物はあったんでしょうか。

稲盛　そういう典型的な方を見いだすのは難しいものですから、孔子、老子の教えとか、お釈迦さまの教えとか、そういうものに解を求めてきました。

日本にそういう方はいなかったのかと思った中で気がついたのは二宮尊徳（にのみやそんとく）＊です。学問はなかったけれども、農民として必死で働き、人間というものをつくっていかれた。晩年は大変立派な人間性を身に備えておられたために、幕府でも用いられて、世の中のために尽くされた、そういう例がありますね。

また、禅宗の白隠（はくいん）＊禅師というお坊さんがいらっしゃいます。白隠さんは静岡県の出身で、とてもすばらしい人間性を備えておられたようです。

神様が逆境を与えてくれた

鎌田　先ほど志の高さのことをおっしゃいました。その志の高さは、どういうふうにして形成されてきたのでしょうか。それは使命感にもつながってくると思うのです。あるいは、人生の意味、目的、どういうふうにこの人生を生きていくのか。社会のため、世のため人のために役立つようにどう生きるのか。

私は、今日は少年時代の話をぜひ伺いたいなと思ってまいりました。私は宗教哲学が専門なのですが、「徳」という漢字を分解してみると、右のつくりは「十四の心」となります。14というのは、イニシエーションの元服をする年齢で、ある意味で社会と自己が対面する時期だと思うんです。そのとき、純粋に、自分自身を問い、世界を問う。そこに１つの志が生まれるのではないか。

孔子の言葉に「学に志す」というのがあります。そ

鎌田東二教授

ういう少年時代、あるいは少女時代のこころの中に何があったのか。それがその人の生涯の使命感とか生き方を生み出していく１つになるのではないかと思っているものですから、幼少期あるいは青春期に、理事長がどういうふうな思いを持たれていたのか。そして、それはその後、志の高さとどういうふうにつながってきたのか。ぜひそのあたりをお伺いしたいのですが。

稲盛　残念ながら、幼少期に、そういう高い志を持っていたわけではございません。子どものころから、高校、大学に行くまでの間は、人一倍正義感が強いということはあったと思いますけれども、人生の中で高い志を持つようなことはあまり考えていませんでした。

私は鹿児島大学を卒業して就職したんですが、当時は朝鮮戦争が終わった直後で、就職難でいい会社はどこも採用してくれませんでした。それで大変貧乏な会社に就職して、そこでファインセラミックスの研究開発に従事したんです。あとから考えれば、当時は就職難でしたが、その会社にいつまでもいなくても、ほかの職もあったかもしれません。しかし、ともかくその会社で、与えられたファインセラミックスの研究開発に一生懸命打ち込まざるを得なかった。これは環境がそうせしめたといいますか、そういう逆境の中で、それに愚痴、不平、不満を鳴らすのではなしに、それが運命だと思って打ち込んだ。やる以上は、すべてのものを払拭して、その研究開発に打ち込もうと思ったのが、志だと言えば言えるかもしれません。

鎌田　私は、逆境に強い人間はどういうふうに形成されてくるのかということに非常に興味を持っています。どんなに社会の危機とか、大変な時期にあっても、そこをくぐり抜けていく力というのはいったい何なんだろう。理事長がその逆境の中で挫けないで、そこに打ち込んでやってこられたのはなぜだとお考えでしょうか。

稲盛　私の場合、中学生のときに終戦になりました。あたり一面焼け野原で、家も焼けてなくなり、大変な貧乏をしました。幸いにも両親は生き残っていたし、兄弟もみんな無事でしたので、掘っ建て小屋を建てて、戦後の混乱の中を生き延びてきました。母親が自分の持っていた着物を売り食いしながら、われわれ子どもたちを養ってくれたのです。やっと大学を卒業して就職し、田舎に仕送りをして親孝行ができるんではないかと思って入った会社は、もう今にも潰れそうなところだった。このようにずっと逆境続きだったのです。逆境を乗り越えていくような志とか勇気があったわけではありません。そういう逆境しか私にはなかったのです。

鎌田　環境そのものが逆境だった。

稲盛　はい。ですから、私の場合は、そういう逆境が続いて襲いかかってきた。そこで挫けるのではなしに、何とか生きなきゃならなかったというだけのことです。逆に言うと、それが私の気力を強くしていき、その後、志というようなものをつくっていった。

後で振り返ってみますと、神様はなんとすばらしい境遇を私に与えてくれたんだろうと思います。

私は地方大学ではありましたが、大学を１番で卒業しましたので、教授たちも「あなただったら一流会社でも通るだろう」と言ってくれたのに、どこも採ってくれなかった。しかし、もし私がまかり間違って、自分の希望した、当時のいい会社に入っておれば、おそらく今の私はなかっただろうと思います。バカじゃありませんでしたので、技術部長ぐらいにはなったかもしれませんが、今の自分にはなっていません。

小学6年生で宗教と出会う

鎌田　極端に言うと、逆境が２種類の人間をつくり上げるように思うんです。１つは、今おっしゃるような、逆境に強くて、人に感謝する、利他的なこころが生まれてくるタイプと、もう１つは、自分さえよければいいというので、逆境の中をエゴイスティックに生き抜いていく利己的なタイプ。

逆境を利他的な方向に生き抜くか、利己的なほうへ生き抜くか、この２つの道があると思うんですけれども、そこで利他のほうへこころが向かうのは、ものの考え方とか、感じ方とか、そういうものがやはり大きく作用していると思うんです。

稲盛　そうですね。確かに逆境というものが、人を２つの方向へ分ける。どちらかというと、世をすね、ひねて、エゴイスティックな人間になっていく人のほうが多いのかもしれません。

私の場合には、幸いだったと思いますが、小学校６年生のときに結核にかかって、それで旧制中学の受験に失敗したんです。私の家の離れのほうに、父親の弟夫婦と、その下の弟、つまり、私から見ると叔父・叔母が住んでいたのですが、その一番上の叔父が結核にかかって、私が小学校５年生のころに死んで、続いてすぐに、奥さんも結核にかかって死に、下の弟の奥さんも、それから２年ぐらい経って死んだんです。３人目の叔父さんが結核で療養しているときに、私も結核を発病しました。叔父・叔母は亡くなって、次の叔父がもう青瓢箪みたいになって寝込んでいるわけですから、近所の人たちには、「あそこは結核の血統だ。かわいそうに、和夫ちゃんとももうお別れだろう」と言われて、自分もそういうふうに思っていました。

当時、谷口雅春（たにぐちまさはる）＊さんという方が仏教の教えの真髄をベースに、「生長の家」という新興宗教をおこしていました。それを母親が信仰し始めて、私も、そういう集まりに２、３回連れていってもらいました。これは私の結核を治そうという気持ちもあったんだろうと思います。

当時、隣にご夫婦が住んでいて、奥さんがきれいな人でした。その方が生け垣の向こうから、「和夫ちゃん、気分はどう？」とか言ってくれるわけです。その奥さんも「生長の家」の信者で、「こんな本が出たよ」といって、縁側まで『生命の實相』という本を持ってこられる。それを貸していただいて、貪るように読んでいった。

鎌田　小学６年のときに、谷口雅春さんの本を読んで人生哲学を学んだ。ずいぶん早いですね。

稲盛　そうしているうちに、空襲が激しくなってきまして、中学１年のときにはもう青瓢箪で寝ている間がないといいますか、空襲がありますから逃げて防空壕に入らなきゃいかん。夜中に雨あられと焼夷弾が降ってきて、周囲の家がどんどん燃える中を母や兄、妹たちと逃げていく。そういうことがしょっちゅうありました。そうやって逃げ回っているうちに、大病はどこかへ行ってしまいました。

そういう宗教的なバックグラウンドが、小学６年生から中学に入るまでずっとありました。そんなことがあったから、逆境の中でも変なほうに行かないで、いい方向に行ったのではないかと思います。

鎌田　今お話を伺って、本当によくわかりました。そういう自分の支えになる経験があるかないかというのは、逆境の中でどう生き抜くか、その方向を決めますね。

稲盛　そうですね。それがまた、会社ができてから、私を非常にいい方向にリードしてくれた。

今言われて気がついたんですけれども、昨今は宗教が非常に軽視されていますが、そういうものに触れるか触れないかによって、人生が大きく変わるのかもしれませんね。

昭和13年（1938）ごろの稲盛家の人々。前列右端が稲盛和夫氏。その後ろが父畉市（けさいち）氏。前列左から２人目が母キミさん

きれいな魂にして旅立たせたい

鎌田　今から14年ぐらい前に、理事長は得度されましたね。先ほどのお話でも、孔子、老子や、お釈迦さまに問いかけてこられたということですが、妙心寺派のお寺で得度された。それは今までやられてきたことの延長線というのか、あるいは、ある節目ということでしょうか。

稲盛　私は、人間というのは、肉体とともに魂が一緒になったものだと思っています。まったく物理的な、60兆個の細胞の塊があって、それが思考も肉体的活動もすべて司っているわけですが、それだけで人間なのではなくて、それと魂が一緒になっているものが人間だと思っています。これは理屈ではなしに、そういうふうに信じているんです。

魂とは何なのかというと、これもまたわからない。こころとは何だというと、われわれが現世に生を受けてから今日まで生きてきた中で、見たり聞いたり、五感を通じて感じとり、また自分の頭で考える思考を通じて、あらゆるものの影響を受けたものだと思っています。そのこころとは別に、魂というものがあると私は信じています。仏教では「山川草木悉皆成仏（さんせんそうもくしっかいじょうぶつ）」と言いますが、森羅万象、あらゆるものに仏が宿っている、魂が宿っている。つまり、みんな等しく同じ魂を持っていて、最も根底の魂はみんな共通なんですが、そこに、過去世も含めて現世で得たこころといいますか、それがかぶさっている。

だから、魂はもともとは非常にピュアなもので、現世でわれわれが経験した思いがこころで、そのこころが覆いかぶさったものが魂だと、私は思っているんで

1997年 9 月、臨済宗妙心寺派の円福寺で得度、法名は大和（だいわ）。雲水の姿で托鉢をする稲盛和夫氏

す。

現世で経験したいろんな思いを含んだ魂が、あの世へ行って、輪廻転生して帰ってくる。だから、神秘体験なんかで過去生を語る子どもがいますが、それはその過去生を覚えている人なんです。

私は65歳になったときに、自分はいつか死を迎える。その死は、肉体の死ではあるけれども、魂は新しい旅立ちをしていく。そのときに、私の魂は、過去世から続いてきて、現世も含めたこころが上にかぶさっている。その私のこころは、ダーティーなこころをいっぱい含んだものですから、そういうものがそのままあの世に旅立っていいのかなと思いました。

だから、同じ魂が新しい旅立ちをするのなら、旅立つまでの間に、上にかぶさった私のこころを磨いて、ダーティーなものを剝がして、きれいな魂にしてあげなければ、人生を生きた意味がないではないか。あなたはすばらしい志を立てて、京セラを世界一流の会社にし、第二電電も現在のKDDIという大きな会社にした、とみんなが称賛してくれたとしても、私の魂にとっては何の価値もありません。

ですから、死ぬまでの間に、私は自分の魂の上にかぶさっているこころを磨いて、悪いこころを払拭して、生まれてきたときの魂よりもっとましな魂にしてあの世へ旅立たせたい。それには何が一番いいかと考えたら、ブッダの教えをもう１回勉強し直すことではないかと思ったのです。

鎌田　それが得度だったのですね。

稲盛　はい。若いころから、会社経営で悩んだりすると、臨済宗妙心寺派の、後に管長猊下をされた西片擔雪＊というご老師のお寺に伺って、お茶を飲ませてもらったり、大変親しくさせていただいておりました。そのご老師にそう申し上げたら、「稲盛さん、それはいいところに気がつかれました。それなら、私のところで得度をしませんか」とおっしゃっていただいた。それで、「お願いします」ということになったんです。

ですが、会社をやっていて忙しいものですから、お寺に入るためには１か月、２か月ぐらいスケジュールを空けなければならない。そこで、この日に得度をさせていただいて、そこからお寺に入って勉強させてもらいますということを決めて、しばらくして健康診断を受けましたら、胃ガンだということがわかった。しかも進行性の胃ガンだからすぐに手術をしなければならない。そこで、その得度をするはずの日に手術をしましょうということになりました。

手術がすんで、まだお粥しか食べていないときに退院しました。禅宗のお寺では毎日お粥ですから、それならちょうどいいんじゃないかということで、まだ体力が回復していなかったのですが得度して、若い雲水さんたち15〜16人といっしょに修行しました。禅寺の朝は３時起床で、みんな掃除も早いし、食べるのも早い。その若い雲水と一緒に、網代笠をかぶって、草鞋を履いて托鉢に行きますと、檀家のおかみさん連中が、「歳のいった新しい雲水が来たということは聞いていたけれども、だいぶお歳ですね」とか言われました（笑）。

京都賞の創設

鎌田　理事長は、稲盛財団を含めて、さらに社会的な貢献をしていこうと思われたわけですが、それはどういうふうな背景があって、そういう決断と実践に向かわれたのでしょうか。

稲盛　京セラという会社がどんどん大きくなっていき、株式を上場するということになりました。私は創業者ですから、大株主でもあって、株式を時価に換算すると、世間一般からは大変なお金持ちだということになるわけです。そのとき、大金を自由に使えると思うのは「悪魔のささやき」だと自分に言い聞かせていました。つまり、悪魔が私をお金持ちにして、私をそそのかすのではないかと思ったのです。

このお金は神様が社会のために使えということであって、それで贅沢をするとか、栄耀栄華を極めようとしてはならない。そのために神様が私をお金持ちにしたのではないはずだと思いました。ちょうどそのころ福井謙一＊先生がノーベル賞をもらわれることになりました。私もいろんな賞をもらったことがあるのですが、大変地味な技術開発、研究開発をしている人たちをたたえるような賞があまりない。そこで、人知れず苦労して研究を続けておられる研究者を励まし、喜んでもらえるような賞をつくりたいと思ったのです。

そこで、ノーベル財団を訪れて、ノーベル賞ができた経緯も勉強させてもらいました。福井先生のノーベ

京都賞の授賞式　毎年11月に国立京都国際会館で催されている。なお、財団法人稲盛財団から京都大学に寄贈された京都大学稲盛財団記念館には、京都賞に関する情報を広く紹介するための「京都賞ライブラリー」が設けられている

ル賞授賞式にも連れて行っていただきました。それで、ノーベル賞と競合するような賞ではなくて、お互いが研鑽できるような賞になればいいと思って稲盛財団をつくり、京セラの株と現金で約200億円を寄付しました。今では700億円ぐらいの財産を稲盛財団は持っています。私の持っている財産は社会から預かったものだと自分に言い聞かせ、それを実行に移したのです。

鎌田　京都賞をつくられたときに、ノーベル賞にはない部門として思想・芸術部門を設けられていますが、そこには理事長のどんな思いが込められているのですか。

稲盛　私は技術屋で、いわゆる科学万能主義的な一面があるんですが、それだけではないという考えがずっとありましたので、どうしても顕彰する中に、第3部門として思想・芸術の分野を入れようと思ったのです。

本当は、哲学や宗教を入れたかったのですが、財団をつくったときに、福井先生、岡本道雄*先生など、京大の錚々たる先生方と一緒にやっていました。その先生方には、「宗教」という言葉は最初から拒絶反応があるのです。

それでも、私はしょっちゅうそういうことを言っていましたが、その先生方が納得してくれるようにすると、どうしてもマイルドなものになってくる。「思想哲学、芸術といった文系のものも立ててバランスを取らなければ」と言いまして、「それだったらけっこうです」というので第3部門ができました。

ところが、第3部門に思想・哲学を入れたんですが、結局、表彰するのは哲学を研究する学問、「哲学学」になってしまうんです。それは私が考えているのとは違うと感じていたので、10年ぐらい前から、「いや、私が思ったのはそういうのではないんです。第3部門で、たとえばマザー・テレサみたいな人が表彰を受けることはないんですか」と言うようになりました。本当は、私は哲学学を研究した人ではなくて、哲学を実践した人たちを顕彰したいと思っていたわけです。

福井先生や岡本先生から、「私は稲盛さんが好きで協力をしているけれども、稲盛さんがそちらのほうに行ってしまうのを防ぐためなんだ」と言われたことが何回もあります。

鎌田　（笑）逆ですね。

稲盛　その先生方が悪いんじゃなくて、まさにそれが今の日本の学会の主流だと思うんです。だから、私の

平石 界助教

友人でもありますが、村上和雄＊さんが「サムシング・グレート」ということを言います。私は彼とよく話をしているけれども、村上先生はすばらしい考え方の持ち主なので、「一度財団で集まって彼の話を聞きましょうよ」と提案すると、「いやいや、あんな話は……」と言って、だれも受けつけてくれない。

ですから、専門の研究者の方は別にして、学者でそういう宗教的なことを言い始めると、もう学者ではないという烙印を押される。

鎌田　そうですね。

稲盛　本当は、理系の分野ですばらしい研究ができているのも、単なる頭脳の産物ではないはずです。何かそういう精神的なものがあるにもかかわらず、それを認めようとしないのだと思います。明治以後、日本に入ってきた近代科学思想が災いをしているのではないでしょうか。今やっと少し見直されてきたという感じです。

鎌田　そうですね。

稲盛　こころの未来研究センターをつくられると聞いたときに、「支援します」と言ったのは、まさにそういうことだったんです。日本を代表するような大学の中で、そういうことに目覚めて研究するのは非常にいいことだと思った。本当は、もっとそこをやっていただきたい。だから、私は前に吉川先生にも言ったんです、「単にこころを心理学の延長みたいなものとして捉えるのでは意味がありませんよ」と。

鎌田　私なんかは、むしろ魂の領域が専門のようなところでやっています。こころの未来研究センターのユニークなところは、カール・ベッカー先生や私は、魂の領域をきちんと取り上げ、そして、生き方と結びつけて考えています。一方にそういう世界があり、もう一方に脳科学があり、真ん中に心理学がある。そういう、宗教から脳科学まで含む大きい意味での「こころ学」をみんなで一緒につくり上げていきましょうと話し合っています。

稲盛　そうであれば、今みんなが求めていることだと思います。

出発点は利他的か利己的か

稲盛　ところで、大橋力（おおはしつとむ）＊先生とは交流がありますか。

吉川　はい、センターができた当初から、大橋先生には折に触れて助言をいただいてきました。

稲盛　私は大橋先生とは財団のほうでお付き合いがあるんです。大橋先生は「利他のこころ」ということを言っておられますね。

分子生物学の研究者も含めて、細胞の領域まで、利己的な遺伝子を持つ細胞というので、利他的行為まですべて利己的な遺伝子による行動として説明がつくという学説があります。

平石　実は私はそっちのほうをやっています。たぶん、少し誤解されているかなと思うところがありまして、究極的には利己的なのかもしれませんけれども、「利他のこころ」を持っていることは否定はしない。というか、もう否定しようがなく「利他のこころ」はあると思うんです。ただ、なぜ人間はそんなに「利他のこころ」を持てる動物になったのか、利己的なはずのものからどうして利他が出てきたのかということを考えたいというのが私の興味なんです。

稲盛　だから、それはもともと利己的なものだと決めつけておられるからであって……。もともと利他的なものというのはあるんですよ。

平石　そういう立場もあると思いますし、私は利己的なほうから解明できるんじゃないかと思っています。最終的にどちらが正しいかは、まだきりがついていませんね。

鎌田　魂の領域を考えると、利他から始まるんですね。

稲盛　始まるんです。

鎌田　それは本当に観点の大きな違いです。

平石　そこは出発点の違いだと思うんですが、ただ、今日お話を伺っていて、私は利己のほうからやっているんですけれども、理事長の考えておられることと、私たちの専門とする分野が今やっていることは、結論はすごく似ています。たとえば、「利他のこころ」について、不正を憎むところがあると理事長はおっしゃいましたが、私どもの専門でも、ただ正しいだけではなくて、不正を憎む、きちんとそれに対処することも大事だと言われていて、すごく似た話になっているのは面白いなと思いました。でも、出発点は違うというところですね。

宗教の役割が大きいバリ島とブータン

吉川　去年から「京大ブータン友好プログラム」というのが始まって、ブータン王国に行く機会があったのですが、それ以来ブータンの文化や宗教に強い関心をもつようになりました。

稲盛　ブータンには、大橋先生もしょっちゅう行っているでしょう？

吉川　ブータンには最近行かれたと聞いています。インドネシアのバリ島にはよく行かれますね。

稲盛　今度、梅原猛さんが私といっしょにバリ島に行きたいというので、大橋先生にお話ししたら、喜んでご案内しましょうと言われて、一緒にいくんです。

鎌田　そうですか。バリ島はセンターの教員も大橋先生にコーディネートしていただいて、何度か行っています。

吉川　バリ島もブータンも、生活のなかで宗教がとても大きな役割を果たしているというのが印象的でした。ブータンの根底にあるのはチベット仏教の価値観です。ガイドさんが、人間にとって一番大事なものはコンパッションつまり思いやりと、知恵と、パワーの３つだと。そして、人間が一番抑えないといけないものは、貪欲であることと嫉妬と無知、その３つだと言っていました。

稲盛　ブッダはそう言っていますね。

鎌田　貪瞋痴（とんじんち）の克服ですね。

吉川　ブータンとの交流の中で、これからどういうことがやっていけるのかを考えていこうと思っています。

　おそらく理事長がお考えになっていることとも繋がると思うのですが、こころの未来研究センターでは、学問のための学問とは違う、新しい「こころ学」をつくっていくことができたらいいなと思っています。

鎌田　そうですね。総勢で100名を超える連携研究員の先生方がいますから。

稲盛　平石さんはブータンに行かれましたか。

平石　まだ行っておりません。

吉川　一度行ってみると、きっと新しい発見があると思います。

鎌田　『風の谷のナウシカ』の風の谷です。

平石　そうですね。

吉川・鎌田・平石　本日はどうもありがとうございました。本当にいいお話をたくさん聞かせていただきました。

稲盛　こちらこそありがとうございました。

（2011年７月25日、京セラ株式会社本社にて）

編集部注

二宮尊徳（1787－1856）　江戸後期の農政家・思想家。幼名金次郎。報徳精神に基づいて小田原藩など六百村の農村を復興、明治以後も農村の精神的支柱として影響を与えた。戦前、多くの小学校に薪を背負って書を読む少年金次郎の像が建てられた。

白隠（1685－1768）　江戸中期の禅僧。臨済宗中興の祖とされる。15歳で出家、諸国を行脚し修行を重ねて大悟、32歳で郷里駿河国の松蔭寺に帰住、多くの禅傑を輩出した。博学で本格的な漢文体の語録を残す一方、平易な法話も得意とした。詩文、書画も多数残る。禅僧がかかる病を治す内観の法を広め、多くの僧を救った。

谷口雅春（1893－1985）　新宗教教団「生長の家」の創始者で初代総裁。大本教に入信、出口王仁三郎の下で活躍したのち同教を去り、「生命の実相を知れ」との啓示を受けて1930年雑誌『生長の家』を創刊して立教した。聖典『生命の實相』、聖経『甘露の法雨』など、生涯の著作は400冊以上に及ぶ。

西片擔雪（1922－2006）　臨済宗妙心寺派僧侶。新潟県栃尾市生まれ。熊本県見性寺住職、八幡円福寺僧堂師家、西宮海清寺僧堂師家等を経て、2002～06年、臨済宗妙心寺派第31代管長に就任。著書に『人生は春人ハ花』『禅のこころ大和のこころ』『無門関提唱』『碧巌録提唱』など。

福井謙一（1918－1998）　化学者。奈良県生まれ。京都帝国大学工学部工業化学科卒業。同大学助教授等を経て教授となり多くの門下生を育てた。1982年退官し同大学名誉教授となり、京都工芸繊維大学学長就任。フロンティア電子理論、軌道対称性と選択則の理論、反応の理論などの業績により1981年ノーベル化学賞受賞。文化勲章受章。

岡本道雄（1913－　）　医学者。京都大学名誉教授、日独文化研究所理事長・所長。京都府舞鶴市生まれ。京都帝国大学医学部卒業。同大学院特別研究生修了（脳神経解剖学）。京都大学総長、科学技術会議議員、臨時教育審議会会長、医道審議会会長、財団法人稲盛財団会長などを歴任。勲一等旭日大綬章受章。ドイツ連邦共和国功労勲章大功労十字星章受章。

村上和雄（1936－　）　分子生物学者。筑波大学名誉教授。奈良県天理市生まれ。京都大学大学院博士課程修了。1983年、高血圧の原因酵素レニンの遺伝子解読に成功、世界的な注目を集める。また人智を超えた偉大なる何者か（サムシング・グレート）についての考察を深めている。日本学士院賞受賞。著書に『生命の暗号』『サムシング・グレート』『遺伝子オンで生きる』『奇跡を呼ぶ100万回の祈り』など。

大橋　力（1933－　）　文明科学研究所所長、公益財団法人国際科学振興財団主席研究員。東北大学農学部卒業。千葉工業大学教授、ＡＴＲ人間情報通信研究所感性脳機能特別研究室長等を歴任。作曲、演出などを手がけ、山城祥二の名前で芸能山城組を主宰するかたわら、情報環境学、感性科学、分子生物学、人工生命、生態人類学などでも既成概念にとらわれない研究を展開している。著書に『音と文明』など。

心のきずな――仏教思想を手がかりとして

木村清孝（鶴見大学学長、東京大学名誉教授）
Kiyotaka KIMURA

序言

筆者はこれまで、中国において体系的な思想形成がなされた華厳教学を中心に、仏教思想の研究を進めてきた。その研究者となることを志してからすでに40年を超えるが、「道いまだ半ば」の思いが深い。

今回、鎌田東二教授とのご縁をきっかけとして、本誌に一文を草することとなった。聞けば、本号は「徳ときずな」をテーマとするという。３月に起きた大震災からの復興が日本全体の喫緊の課題となっている今、まことに時宜を得たものであると思われる。なぜなら、その復興には、社会的経済的な面だけではなく、精神的な面が不可欠であり、「徳ときずな」はそのキーワードの１つと考えられるからである。このテーマの下、本稿も、現に求められている日本の精神的復興に幾分かでも資することになれば、うれしいかぎりである。

現代の状況

初めに、われわれ日本人が共同的に作り出し、その中で生活している現状について見ておきたい。

第２次世界大戦における敗戦から65年、日本は急速な経済復興をなしとげ、一時は「ジャパン・アズ・ナンバーワン」などと持ち上げられる時期もあった。しかし、いわゆるバブルの崩壊後、国際競争が激しさを増し、情報化が進展する流れに否応なく巻き込まれる中で、国家としての日本の力は大きく衰退した。経済的には有数の借金大国であること、政治的には国際社会における指導力・発言力が急速に失われてきたことが、その事実を象徴的に示していよう。

では、そういう状況の中で、われわれの生活はどのように変わったのだろうか。

思うに、仏教が説く人生の「生・老・病・死」のすがたは、変わりようがない。人は、いつの時代にも、生まれ、年老い、病を得、やがて死を迎える。これが「生きる」すがたであり、その実相を仏教では「苦」と捉える。けれども、その「苦」とは、この世で生きることは、思い通りにはいかず、その中に永続的な真実の安らぎはない、という意味である。心に喜びや楽しみを感じることが何も存在しえない、いつでも苦痛を感じて生きている、ということではない。しかし、日本の現状を見ていると、生活の中のささやかな喜びや楽しみも、いっそう小さく、また薄くなってきているような気がしてならない。

生・老・病・死

まず、「生まれること」（生）をめぐっては、さまざまな事情から、「生む」ことが制約され、あるいは敬遠される傾向が顕著である。その結果が、いわゆる「少子化」である。だが、その前提となる男女の交わりに対する関心はむしろ強まっているだろうし、交わりそのものも必ずしも忌避されているわけではなかろう（ただし、一部には、過度の情報依存などにもとづく性への無関心や性能力の減退が見られるとも聞く）。その結果、堕胎率の増加、「赤ちゃんポスト」の誕生などが見られる。ひどい場合には、赤子のいじめ、放置、殺害といったことさえ起こっているのである。

次に、「年老いること」（老）についていえば、２つの大きな問題があると思われる。その第１は、健康に対する不安の増大である。人は、「いつからか」「どの程度か」という点ではかなりの個人差はあろうが、歳をとるごとに体力・知力の衰えを感じるようになる。そして、自分自身にいらだったり、周りの人に当たり散らしたりする。「若いころの健康が維持できない」「遠からず、死に至るかもしれない」という不安は、一般的には、老いが進むにつれてさらに大きくなっていくだろう。

もう１つの問題は、生きがいの喪失である。かつては、日本でも、老人は、年老いて生きているというだけで、一定の敬意が払われていた（ちなみに、この「老人」という語は、現在はおそらく、軽蔑の意を含むがゆえのタブーとなっているが、本来

的にはむしろ尊敬の意が込められていた)。それは、生きることがいかに重く、かつ、大変なことかということが一般に諒解されるとともに、老人それぞれがもつ固有の「経験知」が尊重されたからだろう。しかし今は、生きることの意味がほとんど金銭的価値で計られ、個別的な経験において得られる知恵などは洪水のように押し寄せる情報によって撥ね飛ばされる時代である。それゆえ、「国民総生産」を高める経済活動に参加し、稼げている間はよいが、定年その他の事情でそれができなくなり、国その他から給付される年金等で生活するようになると、尊敬もされなくなり、多くの人は生きがいを失いかける。「自分が生きていること自体が社会に迷惑をかけているのではないか」などと考える人さえ出ているのである。まことにさびしい時代であるといわざるをえない。

次に、「病むこと」(病)に関しては、医学の発展と医療の進歩によって、多くの病気が克服されてきた。このことには、感謝しなければなるまい。また、新しい治療技術の開発によって、現に制圧の途上にある病気も少なくない。しかし他方、複合的なものも含めて、新たな身心の病気の発生もある。いわゆる「難病」の数も、減少しているわけではなさそうである。要するに、病気との闘いはこれからも続くし、一面では、さらに厳しく、難しくなるということであるが、いかに医学が発展し医療が進歩しても、生命体には必ず成長期と衰退期があり、やがて生命活動が停止する時期、すなわち死期が訪れる。「病むこと」は、一面においてそれを人に確認させ、警鐘を鳴らし、根本的な覚悟を求めるものだといってよかろう。

けれども、われわれがその「病む」ことをすんなりと受け入れ、前を向いて生き続けることは容易ではない。健康に対する自信を失い、後ろ向きにじっと死を待つことにもなりかねないのが実情だろう。そして、さらに問題なのは、いったん重い病気になると、現代では多くの場合、長く病院に入れられ、時には数カ月ごとに病院から病院へと移されて、大きな精神的支えになってくれるはずの家族や友人から切り離される状態になる、ということである。そういう中で病人が抱く孤独感は、察するに余りある。「早く死にたい」という思いをもったとしても不思議ではないだろう。

最後に、「死ぬこと」(死)について見てみよう。今は、特定の病気になって治療の甲斐なく死ぬ場合も、あるいは全身的な老衰によって自然に死ぬ場合も、家で死を迎えることは極めて少ない。多くは、病院のベッドにおいてである。最近になって、終末期を在宅治療にしたり、最後だけは家で迎えさせようとする動きも現れてきたが、統計的にはまだごく稀なケースであろう。

しかし、たとい病院における死であっても、生命を全うした死はよい。より深刻な問題は、それ以外の死に方が増えていることである。すなわち、交通事故などによる事故死、地震・津波などの天災、もしくは火事などの人災による災害死、故意または無差別の殺人死、誰にも看取られずに死後に発見される孤独死、みずから命を絶つ自殺などである。これらは、けだし、現代特有の社会的経済的原因にもとづくところが大きいと考えられる。

以上に述べたように、「生・老・病・死」の人生は、現代の日本において、ますます複雑になり、また総じてさらに深刻化しているように思われる。では、そういう状況の中で、われわれはどのようにして互いの心をつなぎ、平安な社会をつくっていくことができるのだろうか。そのための有益な示唆が仏教の中に見出せるのではないかというのが、筆者の思いである。

図1　断食をする釈尊像(ガンダーラ出土、パキスタン・ラホール博物館蔵、協力:シルクロード・キャラバン)

仏教が考える心

仏教の開祖は、周知のように、釈尊(釈迦、ブッダ)である。すなわち、釈尊は、北インドに王国を築いた釈迦族の王子として生まれ、恵まれた生活を送った後、出家して瞑想を、ついで苦行を実習した(図1)。しかし、満足が得られず、苦行を捨てて再び瞑想に入り、悪魔とその侍女たちの誘惑や挑発を斥け(図2)、悟りを開いてブッダ(覚者)となった。その教えが仏教である。しかし、ブッダの教えとしての仏教は、以後、約2500年にわたって各地に広まり、その過程で何度も新たな編集と解釈が繰り返され、思想的にきわめて豊かな内容をもつものとなった。その総体、すなわち、ブッダの教えとして信じられ、伝えられてきたことの全体が、また仏教と呼ばれる。ここでは、この広い意味における仏教の全体を視野に入れ、その中から、とくに重要と思われる「心」の思想について紹介することにしたい。

まず、仏教においては現実の心がどのように捉えられ、それをどうすることが勧められているだろうか。この基本的な問題について、もっとも端的に述べているのは、初期仏教

図 2　タイ美術で描かれた釈尊の降魔
(Photo from *The Life of The Lord Buddha*, courtesy of Asia Books.)

の時代に成立し、南方仏教国において今日まで読みつがれてきている『法句経』(ダンマパダ)である(図3)。すなわち、本経では、「心」を主題とする一章を設け、

- 心は動揺し、ざわめき、護りがたく、制御するのがむずかしい。知恵ある人は、これをまっすぐに直す。矢を作る人が、[材を]矯めて矢をまっすぐにするように。
- 心は捉えがたく、軽々と騒ぎまわり、欲するままに動く。その心をおさめることは、よいことだ。心をおさめれば、安楽がもたらされる。
- 心は遠くまで行き、独りで動き、形なく、胸の奥の洞窟に潜んでいる。この心をコントロールできる人は、死の束縛から逃れられよう。
- 心が煩悩にけがされず、思いが乱されず、善悪の[間違った]はからいを捨て、目覚めている人には、何も恐れることがない。

などと説く。われわれの現実の心のすがたをしっかりと捉えるとともに、それをどうすればよいかを率直、かつ、明確に示しているといえよう。

六識説から八識説へ

こうした心への着目は、一方で心の構造の解明へという方向を生みだす。その素朴な体系的理論が、六識説である。すなわち、心は、眼・耳・鼻・舌・身(皮膚)・意の六根(感覚・意識の器官)が外界の対象である色(いろ・かたちをもつもの)・声・香・味・触(触れられるもの)・法(認識されるもの)と関わることによって、眼識ないし意識という、6つの知覚・認識が形成される、というのである。誰にでも理解できる明解な理論だといえるのではなかろうか。

けれども、これには1つの弱点があった。それは、仏教が他方で「五蘊和合」の人間観(知覚経験の場における人間は、分析的には、色〈身体〉と、受〈感受〉・想〈想起〉・行〈意志〉・識〈認識〉という4つの心のはたらきの和合体と見ることができる、とする)などをよりどころとして、非我論(真実の自我としてのアートマンを立てる必要はない、とする。後には、無我論、つまり、アートマンは存在しない、という思想に変わる)を立てるのに、実際には人は自己中心的にものごとを考え、行動する。しかも、仏教自身もそのことを認めている。ところが、六識説では、この自我的な意識の発生の事実を十分に説明することができないのである。

この問題を深く掘り下げ、本格的な意識論を作り上げたのが、5世紀頃に世に出た無著(アサンガ、図4)・世親(ヴァスバンドゥ)の兄弟ら、大乗仏教瑜伽行派(唯識派)の人々である。かれらは、上述の六識の活動がその奥にある潜在意識に依存していることに気づき、その理論化を試みた。その結果、最終的に定説化したのが八識説である。

八識とは、六識の下に2つの潜在意識の層を置いて意識構造の全体を考えようとするもので、第7識としてマナ識、第8識としてアーラヤ識を加える。このうち、マナ識とは、ほぼ自我意識に相当するもので、これが六識のはたらきを直接的に支え、かつ、規制するという。しかし、本説の特徴的なところは、その奥に

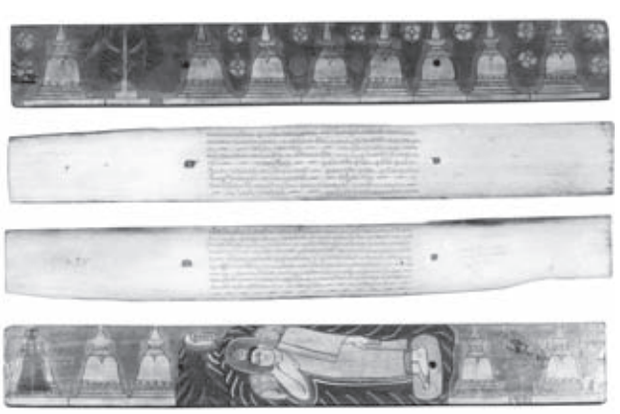


図 3　パームリーフに記されたシンハリー文字の『法句経』(コロンボ国立アーカイブ蔵、Photo from *Dhammapada: Wisdom of the Buddha* (1980), courtesy of Theosophical University Press.)

さらにアーラヤ識があって、これが意識構造全体の基礎として、上の七識を発生させる根拠となると同時に、それらの活動のありようによって香りづけられ、性質を変えていく、とされることである。そして、望ましい方向に向けてこの変化をもたらす基本的な力として、真実の法に触れること、正しい教えを聞くことが挙げられる。さらに、これを起点として、綿密な長期にわたる行によって、やがて迷いの世界を作り上げている意識の全体が智慧へと転換される、という。今から1500年ほども前に、真摯な瞑想修行の副産物として、このように精密な意識論が生まれていたことに驚きを禁じ得ない人は少なくなかろう。

仏性説の展開

また、この学派の傍流から、仏と衆生（生きとし生けるもの）との本来的な一体性を強調する人々も現れた。かれらが唱えた思想を包括的に如来蔵思想と呼ぶ。すべての衆生に仏の本性があるとする仏性説も、これに含まれる。この系譜の思想は、インドではさほど有力なものとはならなかったが、東アジア世界には、今日に至るまで、きわめて大きな影響を与えてきた。そして、その中で、おそらく道教などの影響もあって、インドでは除外されていた植物や無機的な自然も仏性を有すると考えられるようになり、日本では「人も自然もそのままで仏である」とさえ見なされるに至ったのである。

もちろん、この仏性の「性」は、原義的には、心それ自体を指すわけではない。しかし、東アジア世界では、しばしば「仏心」と言い換えられることからも推察できるように、現実的・実践的な視座に立つときには、心のありようと深く関連付けて捉えられることになり、「人の心の本質は善である」という中国思想とも重なり、ほとんど同一視される状況も生まれた。例えば、禅宗が広まる礎を築いた中国・唐代の馬祖道一が説く「平常心是道」（日常のあたりまえの心が、そのまま真理の現れである）は、基本的には、そうした仏性説の展開の上に生まれたものといえるだろう。

よりよく生きるために

前節に紹介したように、仏教においては、心の深い考察がなされ、その中で、人間が生きていく上で、心のありようが生の根幹となっていることがいくつかの観点から明らかにされている。では、われわれは、それらから何を汲み取り、どのようにして現代を我執と文明病の束縛から解放し、ともによりよく生きる道を創っていけばよいのだろうか。

この問いに向かい合うとき、まず想起されるのは、釈尊の最晩年を描く『涅槃経』の中に、釈尊が「自らを島とし、自らをよりどころとせよ。法を島とし、法をよりどころとせよ」と教えられた、とあることである。また、最初期の経典『スッタニパータ』には、「ひとり生まれ、ひとり死ぬ」という厳しい人生の定めを指摘された教説も見える。突き詰めれば、われわれの誰もが、独りで生きるというあり方を背負って生きる外はない。しかし、それは、決して独りよがりのものであってはならない。真実（法）そのものをよりどころとする、責任ある生でなければなるまい。そして、思うに、それを可能にするために求められるのが、この世にある生命体のすべてはいのちのつながりと支え合いの中でのみ生きられるという「共生」の現実の認識と、これを含めて、存在世界の全体が重層的で限りなく深い関係性において成り立っているという高次の縁起観である。そのことを修得してこそ、自他の平等性と尊厳性、そしてそれぞれがもつかけがえのない美しさが見出されると同時に、互いの心がしっかりと結ばれるのではなかろうか。

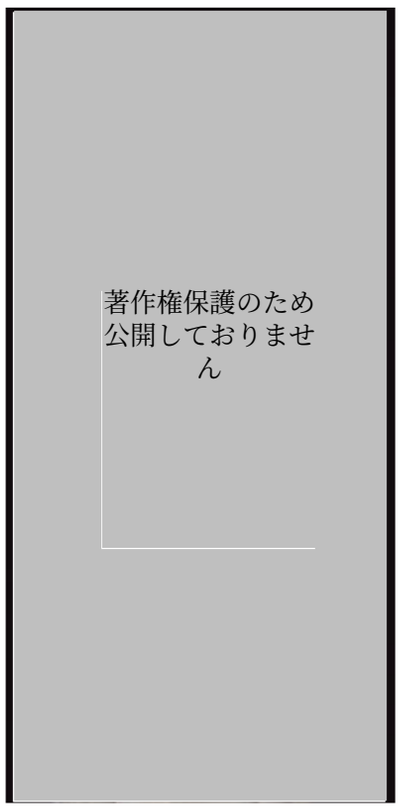


図 4 無著菩薩像（興福寺蔵、写真：飛鳥園）

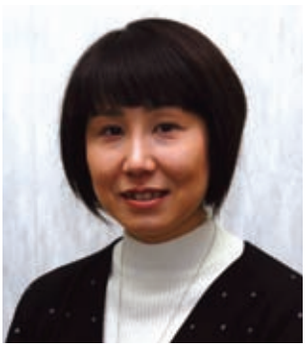
「共成」の理想

けれども、これだけではまだ諦観的で、個人的レベルでの安心は得られても、社会的レベルでの平和は得られない。そのためには、筆者の用語でいえば、「共成」の実践が不可欠だと考えられるのである。

「共成」とは、「共に成す」ことと「共に成る」ことの両義を含み、先に触れた共生・縁起の自覚のもとに手を携えて協働的にことに当たり、次第にその輪を広げながら、助け合って平安な社会の創造へと歩みを進め、その中で、ともにまことの人となる、ということである。この理想を実現することは、容易ではない。それは、筆者自身もよく分かっているつもりである。しかし、この理想を捨てるわけにはいかない。残り少ない人生であるが、さまざまな仕事を通じて、「共成」の理想に少しでも近づけるよう、心が通い合う仲間たちとともに努めていきたいと思う。

進化シミュレーションで絆と徳を探る――頼母子講を例に

中丸麻由子（東京工業大学大学院社会理工学研究科准教授）
Mayuko NAKAMARU



まとまった資金が入用になったらどうする？

まとまった資金が必要になってしまったとき、どうするだろうか？用意周到な人であれば自分の貯蓄があるかもしれないが、誰もがそういうわけではない。すると、現代の日本であれば一般的には銀行から融資を受けるのが無難だろう。

しかし、もし銀行から融資してもらえない立場であるとするとどうするだろうか。知人や親戚からお金を借りるのも１つの方法である。信用があり、日頃からよい関係であれば難なく貸してもらえるが、日頃から関係性が悪く、信用のおけない人という評判があると、貸し渋りされてしまうだろう。また、入用になるたびに知人や親戚を訪ねて頭を下げて廻るのは、時間や労力のコストが非常にかかってしまう。返済について貸し借り間でトラブルが生じることもあるだろう。

このように、ある程度まとまったお金が入用になるのは誰にでも起こることだが、そのたびにコストをかけてしまっては大変である。では、人々は資金が入用になった場合にどのように対処してきたのだろうか？

日本では古くから頼母子講（たのもしこう）あるいは無尽（むじん）と呼ばれる私的制度によって、まとまった資金の調達に対処してきた。沖縄では模合（もあい）という。アジアやアフリカ、そして欧米では移民集団を中心に行われている。英語での一般名称はRotating savings and credit association（Rosca）である。では、頼母子講とはどのような私的制度なのかを説明しよう。

頼母子講とは？

太郎さんはまとまったお金が入用となり頼母子講の発起人になり、数名から数十名人を集めて会合を開く。たとえば10人の講になったとして、１人につき１万円を出資するというルールとしよう。10人から１万円ずつなので、10万円が資金となる。この資金を太郎さんが受け取るとする。すると、後は太郎さんが参加者に出資金を返せばよい、と考えるかもしれない。しかし、頼母子講はここで終わらない。

１カ月後に次の会合を開催し、前回の会合と同じように１人１万円ずつ出資し、10万円が資金となる。これを、太郎さん以外のメンバーのうちの１人が受け取るのである。３回目の会合でも同様にし、10万円の資金を受け取ることができるのは、いままで資金を受け取っていないメンバーであるとする。この会合を合計10回続ける。すると、全員が資金を受け取ることができるのである。人はこのような制度を作り上げてきた。このような私的制度が世界中で普遍的に存在するのも非常に興味深い。

頼母子講は、明治時代以前の銀行のない時代によく行われていた。明治時代になると法制度の下、銀行が設立された。講集団が元になって設立された銀行もあるという。そして時代の流れの中、頼母子講の出番も徐々に少なくなってきた。

また、他国からの移民のように新しい土地で社会的な信用を確立していない人たちや、銀行から相手にされない貧しい人々は、銀行から融資を受けることができない。その場合も、頼母子講によって入用になった資金の調達をしている。そういう意味で、頼母子講は「貧者の銀行」という表現をされる。

沖縄ではいまも老若男女を問わずに模合をしている。商売などのための資金が必要というような経済的な理由の場合もあるが、多くは親睦のためである（辻本ら、2007）。学校を卒業してしまうと親しかった同級生にはなかなか会えないが、模合を月１度行うことで、親睦の場を共有することになる。あえて模合である必要もないと思うかもしれない。しかし、金銭のやり取りがないと、忙しいからという理由で参加しなくなってしまい、いつの間にか疎遠になり、せっかくの絆が切れてしまうかもしれない。その点、金銭のやり取りは拘束力をもつのである。つまり、「会に欠席して、資金も払わない」という悪い評判がたってしまうと社会的信用に大きな傷を付けてしまうため、何が何でも参加して出資はしなければならない。その結果、絆が

深まるのである。

沖縄以外にもいくつかの地方に残っている。2010年に東京新聞などに紹介されたドキュメンタリー映画『うつし世の静寂に』では、神奈川県川崎市宮前区初山で毎月１度開かれている講を取り上げている（詳しくは、ささらプロダクションのHP参照 http://www.sasala-pro.com/）。この地域は新興住宅地域でもあるが、かやぶき屋根の農家が40軒ほど残っている。その旧住民たちは、講の習俗を引き継いでいるという。新聞記事によると、この映画を通して、「自然、風土と人間との共生」や「人との絆」を考えるきっかけになったようだ。

このように頼母子講は経済的にも社会的にも役に立つ便利なシステムであり、私的制度として長いあいだ存在してきた。しかし、頼母子講は非常に不安定な制度でもある。というのは、講の初回の会合で資金を受け取った人がもらい逃げをすると、１度も出資しなくても済むことがあり、金銭的に得をするのである。初回に限らず、多くの人がこのような行動をとると、講は存続できない。このように資金を受け取った後のもらい逃げの行動をデフォルト（債務不履行）と呼ぶ。

講を存続させるためには、このデフォルトを防ぐことが必要である。しかし、講は私的制度であるため、法律で罰金の支払いを命じることも、警察が身柄の拘束をするようなこともできないのである。では、人々はどのようにしてデフォルトを防ぐシステムを作り上げているのだろうか。

デフォルトを防ぐには？

デフォルトを防ぐためにはどうすればいいのだろうか？　まずは講のメンバーを取捨選択するだろう。金銭的に信用のおけない人や、金銭の取引においてどういう人なのかよく分からない場合もメンバーにはしないだろう。また、講のメンバーとして選ばれたとしても、１度デフォルトを起こしてしまうと、社会的信用が落ち、次回に講集団を結成するときには呼ばれないだろう。デフォルトを起こす理由は人それぞれである。金銭的に首が回らないために出資金が支払えない場合や、単に自己利益しか考えていない人の場合もある。出資する気はあるが、金銭的に苦しいためにデフォルトをしてしまいそうな場合には、立て替えも行われている。一方、あまりにも金銭的に苦しく、出資する気もなくてデフォルトを行う場合は、その後に村や街から夜逃げをするという。

では、研究者はどのように捉えているのだろうか。社会学者であるコールマンや政治学者のパットナムによると、信用のおける人が誰であるのかが分かるような地域において講が行われるという。また、講へ加入できるということは、信用できる人という指標にもなっており、講以外の社会的・経済的場面でも信用される。つまり、頼母子講のメンバーになるには日頃からの絆が重要であり、頼母子講に加入できるのは徳が高いことなのである。

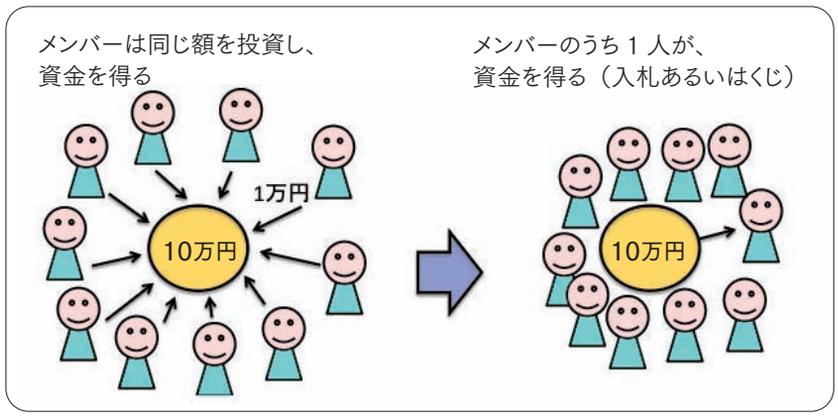


図１a　回転非分割財ゲーム

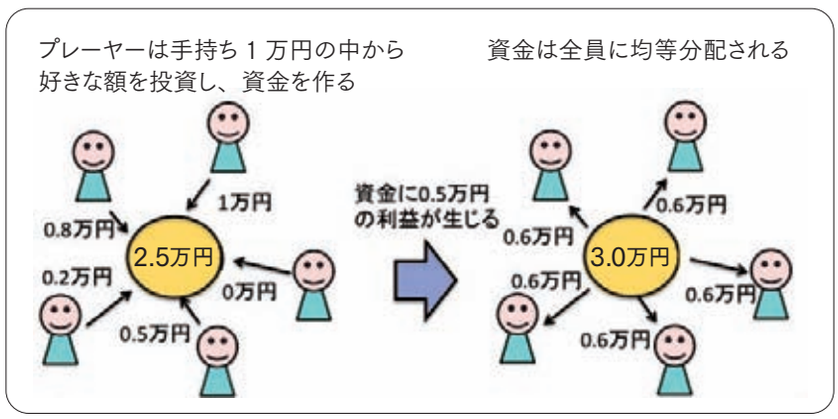


図１b　公共財ゲーム
プレーヤーは手持ち金１万円のうち、好きな額を投資する。この図では、2.5万円が資金となる。仮に資金に0.5万円の利益が生じ、全員に均等配分されるとすると、まったく投資を行わなかったプレーヤー（フリーライダー）は1.6万円獲得しているが、全額を投資したプレーヤーは0.6万円しか獲得しないことになる。このフリーライダー問題を解決することが公共財ゲームでの課題である。

協力行動の進化に関する研究と頼母子講

頼母子講での「出資する・しない」は、講に「協力する・しない」と同じである。すると「協力行動の進化」研究の枠組みで捉えることが可能である。「協力行動の進化」研究はさまざまな研究分野で行われている学

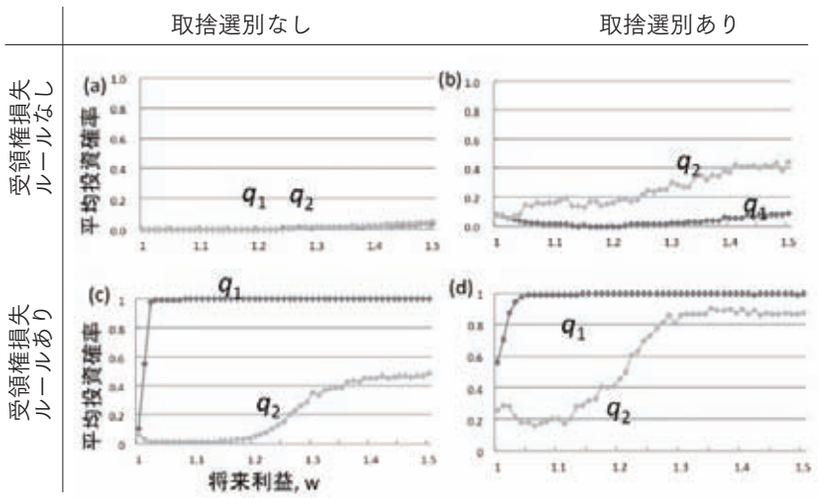


図2　進化シミュレーション結果
(a)-(d)：横軸は将来利益w、縦軸は平均投資確率q_1、q_2である。wが高いほど出資金をビジネスなどに投資して得られる利益が高いことを示す。濃灰色はq_1（資金受領前の投資確率）、薄灰色はq_2（資金受領後の投資確率）を示す。(a)回転非分割財ゲームの結果。(b)メンバーの取捨選択を加味した場合。(c)受領権喪失ルールを加えた場合。(d)メンバーの取捨選択と受領権喪失ルールを加えた場合。

際的な研究テーマである。進化生態学では、「どのようなプロセスによって、進化の結果、生物は協力行動を獲得してきたのか」について研究している。一方、心理学、社会心理学、経済学、社会学、政治学などの社会科学・人文系では、進化そのものを扱うのではなく、進化のアナロジーを用いて、「協力は非協力に比べて損である。それにもかかわらず、人は協力関係を築き上げ、社会を成立させている。それはなぜなのか？」という問題を解き明かそうとしている。研究手法も、生物の調査・実験から、人間を被験者とした社会科学実験、人間社会の調査研究、アンケート調査、そして数理モデルやコンピュータシミュレーションと多岐にわたっている。

筆者は数理モデル・コンピュータシミュレーションによる研究を行っている。進化のアナロジーを用いたコンピュータシミュレーション（進化シミュレーション）によって頼母子講を捉えたときに、どういうことが言えるのかを調べてみた。すでにコールマンやパットナムによって「日頃から構築している絆が肝心」と指摘されている。その範囲内のことしか言えないのか、それともそれ以上のことをコンピュータシミュレーションによって提示できるのであろうか？

頼母子講の進化シミュレーション

筆者は頼母子講のモデル化を行い、進化シミュレーションを行った（Koike *et al.*, 2010）。現実の頼母子講をそのままモデル化すると非常に複雑である。そこで、まずは枝葉を取り除き単純化を行った。すると、回転非分割財ゲーム（Rotating Indivisible Goods Game）という構造が見えてきた（図1 a）。これは筆者が名付けたゲームであるので、初めて聞く人も多いだろう。これから説明しよう。

回転非分割財ゲームではn人のプレーヤーがいる。そして、1人あたりx円持っている。ある会合において、プレーヤーが協力者（出資する）であれば、x円を資金プールへ出資し、非協力者（出資しない）であれば資金プールへは出資しない。そして、プールされた資金は、1人が受け取ることができる。この会合をn回繰り返す。このn回中に同じプレーヤーが2度以上資金を受け取ることはないとする。実際の資金を受け取る順番は、入札で決める場合と籤（くじ）で決める場合、あらかじめ順番を決めている場合の3種類がある。筆者のモデルでは籤とした。また、資金は早く受け取るほどビジネスチャンスでもうけることができるので、早く受け取るほど利益が高くなるという設定とした。

このゲームを聞いて、公共財ゲームと似ていると思うだろう。公共財ゲームでは、n人のプレーヤーがおり、1人当たりx円を持っている（図1 b）。自分の好きな額をプールへ投資する。そのプール金に利益が加算され、それがn人全員に均等配分されるというゲームである。2つのゲームの大きな違いは、資金が均等配分されるか、1人のみが資金を受け取るかである。この違いが、2つのゲームを異質なものにしているのである。公共財ゲームは非常によく研究されている。一方、回転非分割財ゲームはほとんど研究が進んでいない。しかし、このゲームの特徴である輪番システムというのは、実社会においてさまざまなところで用いられており、適用可能である。また、グラミン銀行に代表されるマイクロクレジットは講が元になった金融組織であるので、このゲームを拡張してマイクロクレジットの進化シミュレーション解析をすることも可能である（筆者研究中）。

まずは、回転非分割財ゲームにおいて協力が達成されるかどうかを進化シミュレーションによって確かめてみたところ、協力は達成されないことが分かった（図2 a）。

次に、この回転非分割財ゲームに、コールマンやパットナムの言う講メンバーの取捨選択を加えてみよう。

講メンバーの取捨選択

ここでは、進化ゲーム研究でよく

図３　いしいひさいち「ののちゃん」
朝日新聞2009年４月15日掲載

用いられている評判のモデル(Nowak and Sigmund, 1998）を基にして、講メンバーの取捨選択を回転非分割財ゲームに加えてみよう。Nowak and Sigmund (1998) では、プレーヤーはイメージスコアを持っているとする。これは過去の行動履歴を示す指標であり、イメージスコアが高いほど過去によく協力をし、低いほど協力をしていないという指標となる。この指標は評判と解釈することも可能である。イメージスコアのわかりやすい例として、2009年４月15日付朝日新聞掲載の４コマ漫画「ののちゃん」がある（図３）。この漫画でのキクチ食堂のポイントカードがイメージスコアに当たる。今回の頼母子講の研究では、イメージスコアではなく、評判レベルと呼ぶ。

講集団では、メンバーがあるグループに入りたいかどうかを決めるに加えて、グループがメンバーを選ぶという意思決定も行うだろう。そこで、評判レベルを使って、（１）高い評判レベルのプレーヤーが多いグループに、個人は加入したい、（２）グループは評判レベルの高いプレーヤーの加入を許可する、という２つの意思決定を満たしてはじめてプレーヤーが講のメンバーになれると仮定した（詳細はKoike *et al*. 2010を参考）。図２ｂはメンバーの取捨選択を加えたときの進化シミュレーションの結果であるが、これは出資者が増えたとは言い難い。つまり、講メンバーの取捨選択だけでは、講における協力行動は達成されないのである。

そこで、筆者らは「受領権喪失ルール」と名付けた暗黙のルールをこのモデルに加えたときに、協力が達成されるかどうかを検討した。

受領権喪失ルールの影響

「受領権喪失ルール」とは、資金を受け取る前に、出資しなかった人は、資金を受け取る権利を失う、というルールである。このルールは暗黙に講メンバーに共有されているという。そこで、まずはこのルールがどの程度、影響を与えるかを調べるために、回転非分割財ゲームに受領権喪失ルールを加えたのみの進化シミュレーションを行った（図２ｃ）。すると、資金受領前の出資は増えるが、受領後の出資は低いままという結果となった。つまり、デフォルトが集団を占めているのである。

つぎに、回転非分割財ゲームにグループの取捨選択と受領権喪失ルールを加えて進化シミュレーションを行ったところ、出資率が高くなったのである（図２ｄ）。つまり、Koike *et al*. (2010)のモデル枠組みより、講を成立させるためには、グループメンバーの取捨選択だけではなく、受領権喪失ルールも重要であることを示したのである。

ユートピアと拘束性

講では絆や徳が強調されているが、筆者らの進化シミュレーション研究では、それに加えて受領権喪失ルールのような運営上のルールも講を成立させるには必要不可欠であることが明らかになった。他にも重要なルールがあるかもしれず、それはこれからの研究課題である。

筆者らの研究では検証できなかったこととして、拘束性と信用や絆、徳の関係がある。つまり、自由に行動できるという条件の中では絆や徳は生じないのではないか、ということである。たとえば、親睦の場となっている模合では、金銭を介するために生じる拘束性が人々の絆を深めている。川崎市宮前区初山の講については、新聞ではユートピアのように記述されている。しかしその背後には、現代社会の個人主義に慣れきったわれわれにとっては「好きなときに好きなことをする」という自由がきかないという意味での拘束性があるだろう。人間社会の協力行動が成立する条件を探る研究として、拘束性と協力行動の関係や、拘束性と自由とのトレードオフを考えてみる必要があるだろう。

参考文献

Koike, S., Nakamaru, M., Tsujimoto, M. (2010) “Evolution of cooperation in rotating indivisible goods game”, *Journal of theoretical biology*, 264, 143–153.

Nowak, M. A. and Sigmund, K. (1998) “Evolution of indirect reciprocity by image scoring”, *Nature*, 393, 573–577.

辻本昌弘・國吉美也子・與久田巌 (2007)「沖縄の講集団にみる交換の生成」『社会心理学研究』23, 162-172.

チンパンジー・ボノボにみる「徳」の起源

山本真也（京都大学霊長類研究所ヒト科３種比較研究プロジェクト特定助教）
Shinya YAMAMOTO

「徳」の進化的基盤

ヒトがもつ「徳」は他の動物でもみられるのだろうか。ヒト社会の価値観をヒト以外の動物に押しつけたいわけではない。ともすれば人間中心主義的な問いかけにもみえるが、この問題をひとまず置いておくと、ヒト以外にも「徳」の進化的基盤がみられると考えられる。その典型が利他行動や協力行動である。困っている他者を助けてあげる。仲間と協力して１つの目標を達成させる、あるいは危険から身を守る。このような「徳」につながる行動が霊長類をはじめ動物界に広くみられる。

利他・協力行動は、どのように進化してきたのだろうか。これまで理論的な説明が数多くなされてきた。血縁関係のある仲間を助ければ、結局は自分と同じ遺伝子を多く残すことにつながる。また、助けあわない仲間同士より、助けあう仲間同士のほうが、最終的には多くの利益を得る。これらのことが理論的に証明されてきた。

しかし、理論研究からは「こころ」のはたらきまではなかなか見えてこない。私たちヒトは、いつもこのように理論的に考えて他人の手助けをしているわけではない。他人が困っているのを見ると助けてあげたいと思う。このような「こころ」はどのように進化してきたのだろうか。進化の隣人であるチンパンジーとボノボを通してヒトの利他・協力を見つめなおし、「徳」の原点について考えてみたい。

ここでは、これまでにおこなってきた研究とともに、いままさに取り組んでいる現在進行中の課題も含めて紹介する。研究者の間でも意見が分かれていたり、今後の研究で結論が大きく変わる可能性もある。そのような研究も紹介することで、今後の研究の発展に寄与できればうれしい。これまでの研究の詳細は拙著総説（山本、2010）や平田（2009）・松沢（2010）なども参照していただけると幸いである。

チンパンジーの手助け

自分自身に直接的な利益がなくても他者を助ける。このような利他行動をチンパンジーもみせる（図１）。彼らの利他行動の詳細が私たちの実験研究からわかってきた。

隣り合う２つのブースに、２つの異なる道具使用場面を設定した。ストローを使ってジュースを飲むストロー場面と、ステッキを使ってジュース容器を引き寄せるステッキ場面である。ストロー場面のブースにはステッキを、ステッキ場面のブースにはストローを用意した。つまり、必要な道具は隣のブースにある。相手に道具を拾って渡してもらわないとジュースを手に入れることができない。このような場面に置かれると、チンパンジーは相手に道具を渡してあげることがわかった（図２）。一方が、ブース間のパネルにあいた穴から相手に手を差し伸べて道具を要求する。このように要求されると、たとえ道具で遊んでいる最中でも、たいていは道具を差し出すのだった。

要求されれば手助けする。しかし、自発的に助けあうことは少々難しいようだ。図３・４を見ていただきたい。この場面では、コインを自動販売機に投入すると相手にリンゴが出る仕組みになっている。お互いにコインを投入しあえばお互いにリンゴを食べることができる。しかし、チンパンジー２個体はこのような互

図１　手を差し伸べ、ジャ（左）が木々の間を渡るのを手助けするジレ（右）。（撮影：松沢哲郎）

図 2　ペンデーサ（奥）の要求に応じてステッキを渡そうとするマリ（手前）。このあと、ステッキを受け取ったペンデーサは、手の届かないところにあるジュースを手に入れて飲むことができた。（撮影：山本真也）

恵的な協力関係を自発的に築くことはできなかった。お互い相手が投入するのを待ち、最終的には 2 個体ともコインを投入しなくなってしまった。自発的には相手に利益を与えないという点で、道具渡し実験の結果と共通している。そして、この場面でも相手への要求行動がみられた。なかなかコインを投入しない相手に対して、手を伸ばして催促する（図 3）。さらには、自分の持っているコインを相手に渡して投入してもらおうとする子どもまで現れた（図 4）。要求された個体は、進んでするわけではないが、それでもコインを投入して要求に応えていた。

相手が何を要求しているのかまでチンパンジーは理解しているようだ。どの場面でも、穴から手を伸ばすという形で要求行動は似通っているが、要求の内容はそれぞれ異なっている。図 2 では「道具を取って渡してくれ」、図 3 では「コインを投入してくれ」、図 4 では「コインを受け取ってくれ」と解釈できる。この要求に沿って、働きかけられたチンパンジーはそれぞれの状況に応じた反応を示した。チンパンジーは相手の状況にあわせて柔軟に利他行動を変化させていたと言える。遺伝的にプログラムされた行動でも、刺激に対する自動的な応答でもない。ここに、社会性昆虫などでみられる利他行動との大きな違いがみてとれる。

要求に応えるチンパンジー、自発的に助けるヒト

利他行動の発現には、相手の状況の理解と要求の理解がともに重要である。チンパンジーではこれらふたつの理解が別々に相補的に働いている可能性がある。ヒトでは、相手の困っている状況を見ただけで、相手が何を必要としているのかを理解し、要求されなくても相手を助けることがある。しかし、チンパンジーでは、相手が何を必要としているのかは理解できても、自発的に手助けする行動へとはなかなか移らないようだ。相手が自分に対して要求をしているという明示的なシグナルが必要となる。状況の理解と要求の理解の自動的な結びつき、つまりは利他行動の自発性がヒトとチンパンジーの大きな違いなのかもしれない。

チンパンジーがみせる「要求に応じた利他行動」は効率がいい。利他行動は、直接はその個体の利益にならないため、少なくとも相手の利益にならなければまったく意味のない行動である。その点、「要求に応じた利他行動」は必ず相手の役に立つので無駄になることがない。さらに、認知的負荷も小さい。相手のこころの状態が要求という明示的な行動に表れているからである。見えない相手のこころの状態を常に推測するのではなく、目の前に手が差し伸ばされたときに反応すればよい。認知的負荷が小さく効率的な「要求に応じた利他行動」が進化的な基盤となり、ヒトでは、こころを読む能力が発達するにしたがって自発的な利他行動がみられるようになったのではないだろうか。

利他の文化

このようなチンパンジーでの実験結果を他の研究者と話していると、おもしろいことに国によって違った反応が返ってくることがある。日本の研究者には、チンパンジーとヒト

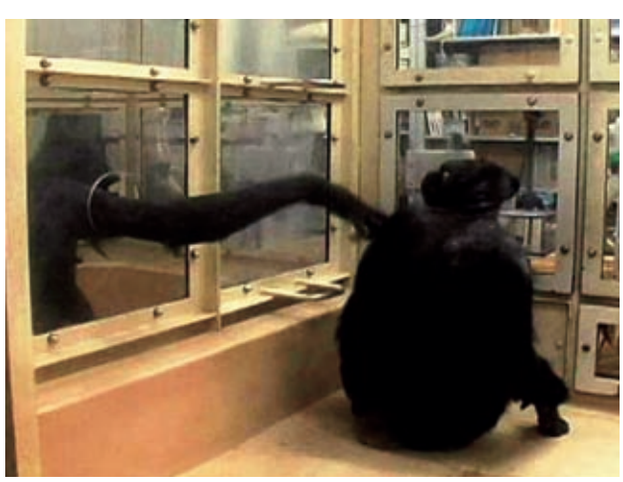


図 3　自動販売機にコインを入れると相手にリンゴが出る場面で、手を伸ばしてマリ（右）にコイン投入を促すペンデーサ（左）。（撮影：山本真也）

図 4　アイ（左）にコインを渡そうとするアユム（右）。（撮影：山本真也）

で手助け行動が起こるメカニズムが違うかもしれないという私の主張が比較的すんなりと受け入れてもらえるような気がする。それに対し、ある海外の研究者と話していると、「チンパンジーもヒトも同じではないか」という反応が返ってきた。求められなければヒトだってほとんど自発的に助けない、とのことである。これまでに訪れた多くの国でさまざまな親切を受けてきた私にとっては意外だった。それに、震災のときには、世界中から数え切れないほどの援助をいただいている。各国・各人に直接援助要請をしたわけではないはずだ。私としてはやはり、自発的な利他性はヒトに普遍的にみられると信じている。しかし、それはそれとして、利他行動に文化差があるのかどうか、このことは調べてみる価値があるだろう。

Svetlova ら（2010）は18カ月と30カ月の幼児を対象に実験をおこない、手助け行動の詳細を検討した。その結果、大人からの明示的な要求に応じて手助けすることが多かった18カ月児に対し、30カ月児ではより自発的に手助けするようになったという。他者の心的状態をより正確に理解できる社会的認知能力が発達するにしたがって自発的な手助けもよりみられるようになる。しかし、自分の欲求を多少なりとも放棄しなければならない利他的な手助けは30カ月児でも難しいという。このような利他的な手助けは、さらに社会的・道義的な規範の理解が進むにしたがってみられるようになるとSvetlova らは主張している。社会規範に文化的な差異があれば、利他行動に文化差がみられてもおかしくはないだろう。

環境や社会が変われば、行動も変わる。このことを考える上で、チンパンジーとボノボの比較は示唆に富む。最後にもうひとつ、ヒトで際立ってみられるがヒト以外の動物であまり研究が進んでいない集団協力行動の進化について、チンパンジーとボノボを通して考察してみたい。

図 5　野生チンパンジーの道渡り。先頭としんがりをオスが務め、かれらが見張りをしている間にメスや若い個体が渡っていくという集団協力がみられる。（撮影：山本真也）

集団での協力

私は今、コンゴ民主共和国のワンバ村で野生ボノボの調査をしながらこの原稿を書いている。つい先日、ボノボの一群が村道を渡って北の森から南の森に移るのを観察した。この村道は幅 3 m ほどではあるが、村人が徒歩や自転車で頻繁に行き来し、オートバイも日に数台は通る道である。ボノボにとっては危険な道渡りに違いない。実際、道を渡る前、ボノボの集団は道路脇の藪に 1 時間ほど留まり、中には木に登って道路の様子をうかがう個体もいた。

7 月 9 日12時31分、最初に道路に姿を見せたのは 2 歳の子どもをお腹に抱いたおとなメスのキクだった。周りを見渡しながら、そろそろと渡っていく。キクが渡り終えると、次に出てきたのは 7 カ月の赤ん坊を抱いた若い母親のフクだ。こちらは早足に南の森へと消えていった。おとなオスは 6 番目にはじめてダイが登場した。前を行く若メスのユキコがきょろきょろあたりを見回している横をそそくさと追い抜いていく。 2 分かけて、老若男女18個体（母親の腹や背に運ばれた子も含めると24個体）が渡り終えた。最後に渡ったのは老齢オスのタワシだった。

この光景、去年暮れから今年 2 月にかけてギニアのボッソウ村で野生チンパンジーを観察していた私には少し驚きだった。ボッソウのチンパンジーも村道を渡って 2 つに分かれた森を行き来する。このときチンパンジーは「協力」することが知られている（Hockings *et al*. 2006, 図 5 ）。最初に道に出てくるのはたいていおとなのオスだ。このオスが道渡りの途中で立ち止まって周りを警戒している間に、メスや若い個体が渡っていく。そしてしんがりを務めるのも元気なおとなのオスであることが多い。お腹に小さな子どもを抱えたメスが最初に渡るなどということはほとんどない。そして、チンパンジー、とくにおとなのオスでよく見られる他個体を待つという見張り行動が今回のボノボの道渡りでは確認できなかった。

もしかすると、集団での協力行動は、ボノボに比べてチンパンジーでより発達しているのかもしれない。チンパンジーは競合的な社会を築いている。隣接群とは敵対的関係にあり、時には集団間で殺し合いの戦争に発展することもある。このようなチンパンジーにとって、集団で協力する能力は必須である。それに対し、ボノボの社

会関係は驚くほど平和だ。集団内でのケンカの頻度は低く、頻繁に食物分配がみられる（図６）。運よく集団間の出会いを観察する機会にも恵まれたが、違う集団の個体同士が仲睦まじく毛づくろいしあったり、中には大きな果実を分け合って食べる個体までいた。このようなボノボにとって、集団で協力するという能力はチンパンジーほど発達しなかったのかもしれない。まだまだ仮説を立てる段階で、これからデータの蓄積と検証が必要である。しかし、もしこの仮説が正しいとすると、ヒトで顕著にみられる「協力」と「戦争」という２つの側面が簡単に正と負に切り分けられないことを示している。

図６　野生ボノボの食物分配。チンパンジーでは狩猟によって得た肉が複数個体によって消費されることが多いが、ボノボでは果実が頻繁に分配される。非血縁個体間はもちろん、違う群れの個体間で果実分配が起こることも確認された。（撮影：山本真也）

協力の未来に向けて

チンパンジーやボノボでも、利他や協力といった「徳」の基盤がみられることがわかってきた。その上で、利他や協力を「道徳的行動」として社会規範化した点がヒトの大きな特徴だと私は考えている。チンパンジーやボノボでみられる手助け行動や食物分配はあくまで２者間の関係である。手助けしない個体や食物分配を拒否したからといって、第三者から非難されることはない。チンパンジーでみられた集団協力にしても、集団内のメスや自分の遺伝子を受け継いでいる可能性の高い子どもを守る行為であり、社会規範に従った行動である証拠はない。ヒトでは、主要宗教の多くが利他や協力を教義に入れていることからもわかるように、利他・協力を促進する社会規範が存在する。評判を介した第三者の評価システム（間接互恵）も効いているのだろう。「情けは人のためならず、めぐりめぐって己がため」ということわざがあるように、利他的な振る舞いをした人はよい評判を得て、周りの人からよくしてもらいやすくなる。このような社会では、たとえ手助けした相手に評価されなくても、よい評判さえ得られれば、後々の自分の利益へと結びつきやすい。逆に手助けをしないと悪い評判が付き、罰せられる恐れもある。このような社会規範・間接互恵システムの存在が自発的な利他行動もより促進させたのではないだろうか。

このシステムは、利他・協力社会を発展させる上で重要であるが、負の面もあわせ持つ可能性がある。「おせっかい」や、さらには「ありがた迷惑」がはびこる危険性である。相手のためになるという本来の機能が失われた“利他的”行動である。相手が必要としていないにもかかわらず手助けしたり、相手のニーズとはかけ離れたトンチンカンな援助をしたり、このような自分本位な“利他的”行動はありがた迷惑以外のなにものでもない。この意味では、チンパンジーの「要求に応える手助け」は、もっともシンプルで的を射た利他行動だと言えるかもしれない。相手本位の行動であること。それが、なによりも利他行動で大切なことなのではないだろうか。

要求に応じるチンパンジーと自発的に助けるヒト。そして、競合的社会で協力して集団を守るチンパンジーと平和的な社会で集団協力に乏しい（かもしれない）ボノボ。どちらが優れているかという問題ではない。どちらもそれぞれの社会に適応した助けあい社会を築いているのだと思う。チンパンジーやボノボをみていると、利他や協力といった「徳」の原点がみえてくる。これからの社会を考えていくとき、従来の価値観に固執せず、この原点に立ち返った上で新たな利他・協力社会を構築していくことが必要だろう。チンパンジーとボノボを研究できるというヒトの特権を活かし、両者のよい面を学びとっていければと自戒をこめつつ願っている。

参考文献

平田聡、2009年、「チンパンジーの協力行動」『霊長類研究』25, 55-66.
Hockings. K., Anderson, J., & Matsuzawa, T. 2006, Road crossing in chimpanzees: A risky business. *Current Biology,* 16, 668–670.
松沢哲郎編、2010年、『人間とは何か』岩波書店.
Svetlova, M., Nichols, S. R., & Brownell, C. A. 2010 Toddlers' prosocial behavior: from instrumental to empathic to altruistic helping. *Child Development*, 81, 1814–1827.
山本真也、2010年、「要求に応えるチンパンジー：利他・互恵性の進化的基盤」『心理学評論』53, 422-433.

徳と絆

上田紀行（東京工業大学大学院社会理工学研究科准教授）
Noriyuki UEDA

「絆」と「徳」ははたして良きものか

「徳」と「絆」について、いま論じることにはたいへん大きな意味があります。東日本大震災という大災害が襲い、復興は始まったばかりです。そして絆や徳はまさに私たちが悲劇に直面したとき、もっとも強く意識させられるものでしょう。

しかし「徳」も「絆」も論じるのにやっかいな概念です。問題なのは、徳も絆も一般に「良いもの」だと思われているということでしょう。その自明性があるので、「徳」とか「絆」と言われると、批判的精神が停止してしまいやすい。「徳」は道徳教育等をめぐって、より批判を受けてきた言葉かもしれませんが、「絆」に関しては良いものだという自明性の中に完全に組み込まれているように見えます。しかし、はたして「絆」とはそんなに手放しで賞賛するほど良きものなのでしょうか。

今回の大震災の後でも、その直後から「がんばろう日本！」というキャッチフレーズが連呼されてきました。また私の住んでいる地元の商店街では、すべての街路灯に「絆」という旗が掲げられています。

しかし、私が震災後に『慈悲の怒り――震災後を生きる心のマネジメント』（朝日新聞出版）を緊急出版しなければいけないと強く思ったのは、この「がんばろう！」の洪水が１つの大きな理由でした。がんばろうと言って、何をがんばるのか。誰がどのように誰のためにがんばるのか。どんな「絆」を結ぶのか。そのことが明らかにされないままの「がんばろう！」の連呼は、判断停止の言葉であり、いま議論しておかなければいけないことから逃走し、気持ちのいい「がんばろう！」や「絆」といった言葉に逃げ込むことでしかないと思われたのです。

後世にまで莫大な負の遺産を残すこととなった原発事故、私は私たちの世代の責任を考えるだけで、大きな後悔の念に苛まれ、子どもたちや孫たちの世代に、そして福島の人々と大地に申し訳なく思う気持ちで押しつぶされそうになります。しかし、この原発事故をもたらしたのもある種の「絆」ではなかったのでしょうか。

福島の事故が起こった後でも、玄海原発の再開のための公開フォーラムに九州電力が子会社等の社員を動員し、再開への前向きな意見を表明することを呼びかけていたという、いわゆる「やらせ」メール事件が発覚しました。そうしたあり方は、これまでも常態化していたもので、それゆえ事故後のこんな状況下でも前と同じように行ってしまったようです。

これもまた「絆」のひとつのあり方です。皆で力を合わせて「がんばって」事業を前に進めようという「絆」です。それはいまとなっては「徳」のある「絆」のあり方とはとても思えませんが、しかし事故の前にはどうだったでしょうか。「そんな行動は私の信条からして許せるものではありません」と言ってフォーラムへの参加を拒否した人は、その会社の中ではむしろ他者への配慮がない人として、「人徳が足りない」とか言われていたかもしれません。

つまり一見良きもののように見える「絆」も、かなり両義的なものだということが分かります。それがどのような「絆」なのかが問われなければならないのです。

「徳」もまた両義的です。皆がその人を「徳のある人」と認識し、評価することが「徳」の要件なのだとすれば、それはその社会の人々の意識のあり方に依存することになります。そしてそうした「徳」は、その同音異義語である「得」と混同される可能性を常に深く含有していることになります。「得」と「徳」の関係です。

それはある社会の成員に「得」をもたらす人を「徳」ある人と賞賛するといった傾向です。例えば、江戸時代に外界から途絶した山村への道

を開くべく、毎日少しずつ岩盤をのみで削り、とうとう一生かかって道を開通させた人の「徳」を皆が讃え、その道にその人の名前をつけて後世にその徳を伝えようとするのはとてもよく分かります。しかし、現代においてはどうでしょうか。誰も利用しない空港を誘致する、自動車の走らない道を田んぼの真ん中に通す、それはもちろん一時的にその町や村を富ませ、皆に「得」を与えるでしょう。しかしそれがいったい「徳」なのか。多くの事業において、富が首長の同族企業や後援者たちに落ちていることは広く知られています。しかし、その取り分に預かりたいという人たちが、お金を持ってきた人の「徳」を至るところで讃えてきた、そのような「得＝徳」の国に私たちは生きてきました。そしてその帰結の１つが今回の原発事故であったことも確かなことなのです。

上田紀行『慈悲の怒り ―― 震災後を生きる心のマネジメント』(朝日新聞出版)

猪瀬直樹『昭和16年夏の敗戦』(中公文庫)

丸山眞男『丸山眞男セレクション』(平凡社ライブラリー)

「絆」と「徳」に、私たちが「良きもの」という期待を込めたいというのは分かります。しかし、そのどちらも社会の中で機能している言葉なのであり、その言葉が意味するものがそれ自体本質的に良きものであるという自明性にはまり込んでしまっては、私たちにとって失うものがあまりに大きいと言えるでしょう。いま必要なのは、「絆」や「徳」の批判的再構築であり、そしてそれを東日本大震災後の状況に即して考えてみたいと思うのです。

今ここにいない人たちに対する「絆」と「徳」とは

原発事故への悔恨に戻りたいと思います。それは私たちの子どもたちに、そしてまだ顔を見ることさえできないような将来世代の子どもたちに、大きな負の遺産を遺してしまったという悔恨です。私たちの「絆」や「得＝徳」が、他の人たちにとっては大きな負の連鎖、あるいは暴力性となって現れてしまった。ですから、絆を考えるときには、目に見えて、ここに生きている人間同士の絆が、ここにいない人たち、ものたちに対して、何をもたらすのかについて考えないといけません。つまり、私たちが絆の中で気持ちが良くて、幸せだという共同幻想が、「絆」や「徳」の名の下で他者を踏みつけているかもしれないと、いかにして想像の翼をのばせるのかということです。

しかし、日本人はこの共同幻想に弱い性格を持っています。日常でも「空気を読め」とか言われるように、空気が一度できてしまうと、それに対してNOがなかなか言えない。私が『慈悲の怒り』の中で論じたのも、原発の事故を起こしてしまったような構造と、300万人もの人の命を奪った第２次世界大戦に突入してしまった原因が非常に似ているということでした。

たとえば猪瀬直樹氏の『昭和16年夏の敗戦』(中公文庫)が参考になります。昭和16年夏というと、真珠湾攻撃のほぼ半年前ですが、前年に内閣総力戦研究所という機関が作られて、各省や陸海軍、そして民間から30歳くらいの若手のバリバリのエリートたちが集められます。そして「仮に日米開戦が起こったら、どういうことになるか」をテーマにシミュレーションをしました。

その結果は、最初はインドネシアに石油を取りに行って、成功する。しかしその石油をタンカーで運んでいるうちに、連合軍側にシーレーンが封鎖されて、どんどんタンカーが沈められて、本土に石油が届かずに戦局はジリ貧になりながら長期化し、最後にはソ連が不可侵条約を破って攻めてきて負ける。驚くべきことに、事実、このとおりに負けたわけです。この若者たちは、首相や軍の上層部を前にシミュレーションの結果を披露しているのですが、無視されてしまう。なぜ無視したのかというと、すでに「開戦ありき」の空気ができあがっていて、回避するわけにはいかなかったというのです。福島第一原発も今から見れば、津波に対してはあれだけ危険な構造を持っていて、それが指摘されていたにもかかわらず、合理的な対応が取られることはありませんでした。

さらに丸山眞男の「軍国主義者の精神形態」(『丸山眞男セレクション』平凡社ライブラリー)。戦後の東京

裁判で開戦に導いた大臣たちが次々と尋問されますが、大臣たちは不思議な答えを連発します。例えば歴代内閣のフィクサーであった木戸幸一内大臣は、日独伊三国同盟について、賛否の態度を問われて、こう答えています。

「私個人としてはこの同盟には反対でありました」

東郷茂徳元外相も、

「私の個人的意見は反対でありましたが、すべて物事にはなり行きがあります。……前にきまった政策が一旦既成事実になった以上は、これを変えることは甚だ簡単ではありません」

小磯国昭元首相もこう言います。

「われわれ日本人の行き方として、自分の意見は意見、議論は議論といたしまして、国策がいやしくも決定せられました以上、われわれはその国策に従って努力するというのがわれわれに課せられた従来の慣習であり、また尊重せらるる行き方であります」

国策がどこかで決まって、空気が確定してしまえば、首相であろうが外相であろうが変えられない。私というものを殺してその役割に邁進するのが日本人のあり方だということです。これを聞いて、外国人の検察官や裁判官たちは、「何という無責任国家だ」と呆れてしまうのですが、この大臣たちの感覚が日本人として分かってしまうところもあるのが怖い。

東京電力の社長が避難所で土下座をしながら謝っていました。ところがすべてを失った人の前で謝罪しながら、自分は当初は給料の２分の１を確保して、3600万円をもらいながら、土下座をしていたわけです。普通の感覚では、驚くほかない強心臓ですが、一方で日本人なら、「この社長、可愛そうね」と思ってしまうところがあります。「前の社長たちは事故も起こらないで、退職金も全部もらっていったのに、たまたまこの時期に社長になっちゃって、ほんと、可愛そうな人だわね」と。だからちゃんと3600万円も残しておいたのでしょう。

70年前の「軍国支配者」はわれわれの中にまだ厳然として生きています。空気が確定してしまえば、みんなが自分を殺してしまって言挙げをしない。ですから日本社会では、その空気というものがはたして他者に対して暴力性を含んでいないのか、ということの検討が非常に重要になってきます。

そしてもう１つ、ここで気付かされることがあります。それは、「絆」と「徳」ということを考えるときに、われわれは、今ここにいる、見える人間のことだけを考えていていいのだろうか、今ここにいない人とか、今ここにいないものも同時に考えなければいけないのではないかということです。原発の場合は、ここに今いない将来世代の、今はまだ生まれていない子どもたちのことも考えて行動しなければいけなかったのに、今目に見えている人たちの承認を得ることだけを考えて突っ走ってしまった。私たちが気づくべきは、誰もが常に目に前にある、「世間」からの評価というものに引っ張られてしまって、その外にあるものが見えにくくなる構造を私たちの社会は持ち、そして私たちひとりひとりの意識がそれを支えているということです。

「宗教性」の再構築

「見えない存在」を感じること、それは広い意味での「宗教性」の課題でもあります。しかし「宗教」というと多くの日本人はそれがむしろ「日本的世間」を強化するものであると思っているのではないでしょうか。個人を家や集団に縛り付け、世間体から葬式を行う、戦死者を英霊と祀り上げるといったように。

しかし、現代日本社会の問題点への鋭敏な感覚を持った宗教者たちは、明らかにその「世間」が問題なのだということを鋭く察知し、そこからの脱出と宗教性の再構築を構想しだしています。例えばダライ・ラマ14世も、私との対談の中で、日本において神道や仏教の再活性化が求められるが、その際には「リベラルな思考と行動」を獲得することが必要だと力説していました。「日本人は自分の思ったことを何も言わないし、発言や行動の責任を取りたがらないね」というのです（『ダライ・ラマとの対話』講談社文庫）。何回にも及ぶ来日で、そのことを痛感されたのでしょう。

ダライ・ラマは外国人ですので、何を言われても所詮外からの目と思われるかもしれません。しかし、日本仏教の中心人物のひとりであることに疑いのない、浄土真宗本願寺派の第24代門主、大谷光真師もまた私との対談の中で、これまでの日本社会における絆や徳の、閉じたあり方を開いていくことを、意識的に提唱しているように思われます。

大谷師に私は真宗の儀式の最後に必ず唱和する、親鸞聖人が書かれた和讃である「恩徳讃」の意味を聞いてみました。「如来大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし　師主知識の恩徳も、骨をくだきても謝すべし」。「如来」とは阿弥陀如来のことであり、「師主知識」は、先輩である仏教者たちであり、それに対する「報恩感謝」への激烈なまでの決意が説かれているのですが、現実の儀式ではルーティン化され、その思いがあまり感じられません。しかし、そもそも阿弥陀さまに報ずるとはどういうことなのでしょうか。大谷師はこう答えます。

「ご恩というのは、阿弥陀様に救われて仏になる救いをいただいているということですね。それに対して報じるといっても、阿弥陀様にまったくお返しすることはできないというか、返してもしょうがない。です

からその方向を変えて、世の中に向かって自分のできることを精一杯する。第一義的には阿弥陀様に救われたという浄土真宗を、今度は周りに伝えていくことであろうと思いますが、必ずしもそこに留まらなくて、社会的な活動でも何でも、自分がいいと思ったことをする。自分の利益のためにではない、取引としての仕事でもないところに働きかける。私が味わっているというか、受け取っているのはそういうことです。何かを受け取ったからその人に返すという往復運動だと、横へも将来へも広がらないですよね。実際に阿弥陀様に向かって〈ありがとうございます〉というのは大事なことですし、それをおろそかにしてはいけないと思いますが、そのことを〈身を粉にしても報ずべし〉だとは私には感じられない。やはり自分の心身を働かせて、この世、あるいは次の世代に働きかけるということが大切なのではないでしょうか」(『今、ここに生きる仏教』平凡社)。

「見えない他者」への無償の贈与としての「徳」

文化人類学や社会学の「社会的交換理論」では、交換体系には、「限定交換」と「一般交換」と2つがあるとされます。限定交換は、私があげたらその人が戻す。二者関係で、私があげたらその人が戻す、をくりかえしていく。例えばあの人からお野菜をもらったから魚を返さないと、ということを続けていきます。一般交換というのは、私が誰かに物をあげたとして、その人からは私に直接は返ってこないのですが、私の贈与したものがあちこちを巡って、いつか私に返ってくる。これらの交換体系はモースの『贈与論』やレヴィ＝ストロースの『親族の基本体系』などで研究されてきました。

そこでは限定交換よりも一般交換のほうが社会の信頼性と安定性は高いと言われています。この人にこれだけもらったから、この人にこれだけ返すというのは、その二者間の信頼関係の話です。ところがこの人にあげたら、これが巡り巡っていつか返ってくると思えるのは、社会に対する信頼感がないとできません。つまり、この人にあげるときは、まわりの社会の利他性のシステムに委ねて、無償で贈与するわけです。さらに時間軸も関係してきます。もしかしたら返ってくるのは私の代ではないかもしれない。だから私はそこで「損」をするかもしれない、しかし未来への贈与を喜んで行うということです。

上田紀行『ダライ・ラマとの対話』(講談社文庫)

大谷光真・上田紀行『今、ここに生きる仏教』(平凡社)

この大谷師の発言は、「南無阿弥陀仏」がえてして阿弥陀さまとの限定交換になってしまっていて、世界がそこで閉じてしまっていることを鋭く指摘しています。阿弥陀さまへの「報恩」とは、阿弥陀さまに感謝し、それを一心に信ずるといった二者間関係を指すのではなく、阿弥陀さまから贈与された恵みを、社会へ未来へと振り向けていくというダイナミックな社会的行為なのであり、そのことに「身を粉にしても」コミットするという決意だというのです。

これは浄土真宗に限らず、現代の宗教が陥りがちな、自己の「得」を目指す信仰となりがちな問題の指摘であるとともに、宗教の分野だけではなく、私たちのすべての行為が、獲得した「得」に対して「得」をもって返すという、「徳」なき交換となっているということへの強烈な批判になっています。経済的利益を与えてくれることを期待して政治家に票を入れるといった行為からは、「徳」は生まれ得ないのです。

「徳」は「得」ではありません。見える他者との「得」の利害関係ではなく、「見えない他者」へ無償で贈与すること、幸せを祈ること、そのために行動することが「徳」なのです。しかし「見える世界」だけを見ている私たちにはその「徳」の世界が見えない。そこで、「見えない」阿弥陀如来からの贈与を感じ、そのことに感謝し、報じる決意を持つ中で、「見えない」人たち、ものたちとの「絆」を結んでいる私を認識し、その中で私たちは「徳」ある行動を取れるようになるというのです。

これは阿弥陀如来に限らず、大日如来にせよ、観音菩薩にせよ、「見えないもの」からの力をいただき、それを「まだ見ぬ者たち」への「徳」ある行動に振り向けるという、様々な宗教に共通した構造のように思えます。限定交換としての「得」ではなく、一般交換としての「徳」の宗教性こそが、現代に求められているものだといえるでしょう。そしてそれは宗教のみならず、私たちの社会が今こそ見直さなければならない、「絆」と「徳」のあり方なのです。

悔恨から未来へ。私たちの行動がいま問われています。

エッセイ

幸せを考えさせる国

吉川左紀子（こころの未来研究センター長）
Sakiko YOSHIKAWA

2010年の後期から始まった、京都大学ブータン友好プログラムに参加している。当初、このプログラムのことを知ったとき、私は「え、ブータン？　どこにある国ですか？」というくらい白紙の状態だったのだが、秋の曇り空のブータンを１週間ほど旅したあとは、この国のもつ不思議な魅力に惹かれ、強い関心をもつようになった。

ブータンといえば、知る人ぞ知る「国民総幸福（Gross National Happiness）」を政策にかかげる、ヒマラヤ山脈の中腹にある人口70万の小さな王国である。インドと中国に挟まれた発展途上国で、国としての生計をたてるにはインドや日本を含む外国からの援助が必要である。地方の農村では、今でも電気のない生活をしている人たちがいるし、東西に一本走っている幹線道路は、片道１車線の狭いワインディングロード。国の面積は九州よりも少し小さいくらいだが、西の端から東の端まで移動するのに2,000ｍから3,000ｍ級の峠をいくつも越えねばならず、３日以上かかるという大変不便な国でもある。こんな「客観的」描写から思い浮かぶのは、幸せとはずいぶん距離のある国なのではないだろうか。

ところが実際に行ってみると、不思議なことに、ここは幸福を国の政策にかかげるのにふさわしい国だなあ、と納得できるのである。一体どうしてだろうか……。

考えても理由がよく分からないときには、自由連想という方法を使ってみるのが一番だ。私の最初の滞在は、１週間ほどの短い期間だったが、旅で知ったブータンの人たちの印象を思い出すまま並べてみると、こんな様子になる。

１）祈る人たちである（寺院にも学校にも病院にも、大きなマニ車が備えてあり、通りかかった人が習慣のようにそれを回してゆく）。２）謙虚だが誇り高い人たちである（行政府の人たちの言葉のはしばしから、国の将来に対する使命感を感じた）。３）おいしいお茶とお菓子をふるまう人たちである（役所や民家で出されるお茶がいつもおいしかった）。４）教えること、教わることを大切にしている人たちである（立ち寄った小学校や大学で、生徒や学生が生き生きと楽しそうだった）。

２度目、３度目の旅で出会った人たちとのやりとりや観察から、さらに次のようなことにも気が付いた。

５）現世のことだけでなく、前世や来世のことも考える人たちである。６）伝統衣装をおしゃれに着こなす人たちである（色遣いや着こなしに気を配り、寺院のお祭りでは小さな子どももきちんと正装する）。７）虫を殺さない人たちである（そのせいだろうか、ハエものんびりしていて手で追ってもすぐには飛ばない。不思議だ……）。

祈り。生きる姿勢。人をもてなす心。育み導くこと。生と死。美の意識。命と自然への敬意。まだ直感に過ぎないが、ブータンの今のあり方をじっくり考えることで、日本人のあるべき姿につながる世界が見えてくるように思える。ブータン政府で働く日本人女性の話では、ブータンの首相は「幸せはひとりひとりが感じる主観的なもの。自分たちは幸せを目指した政治をするだけ」と、とてもシンプルだそうだ。

「そして、おじいさんとおばあさんは、末長く幸せに暮らしましたとさ」。ブータンを旅していると、なぜか日本の昔話にでてくるこの最後のフレーズが思い浮かぶ。この「幸せ」は、人との暮らしの中の、素朴で穏やかな幸せの感覚だろう。このシンプルさと、それを実現するむずかしさ。

ブータンは、私たちに、幸せを考えさせる国である。

ブータン仏教のお祭り（ツェチュ）。2011年７月10日、クジェラカンで撮影

タシチョゾン。国王執務室とブータン仏教総本山がある

エッセイ

「徳が先か、きずなが先か。それが問題だ」

平石　界（こころの未来研究センター助教）
Kai HIRAISHI

７月頭に南仏モンペリエで開催された「人間行動と進化学会」に参加してきました。夜９時までの研究報告のあと、まだ明るい街に繰り出して夕食をとり、ホテルでシャワーを浴びて寝て、翌朝また会場に戻る充実した５日間でした。

この学会、人間性の進化がテーマなのですが、中でも「徳の進化」が重要な問題となっています。実際、今年の学会の冒頭を飾ったのはサラ・ハーディ博士による協力性の進化にかんする講演でした。ハーディ博士は、霊長類研究者として、特に女性性、母性の問題について研究してきた方です。なぜ母性の研究が、協力性の話と結びつくのでしょうか？

しばしば「人間はなんて身勝手な動物なのだろう」とか「同じ種で殺し合いをするのは人間くらいだ」などと言われることがあります。しかし意外かもしれませんが、人間は、動物界の中でも抜きん出て協力的な存在です。たとえば人間ともっとも近縁な動物であるチンパンジー。彼（女）らもなかなか協力的だったりしますが、人間と比べると、その程度は小さいといわざるを得ません(本号の山本論考をご覧ください)。何が人間とチンパンジーの違いをもたらしたのでしょうか。

筆者、ポスターセッションの前で

奥に見えるのが「人間行動と進化学会」会場の建物

その回答の１つとして、家族や仲間が一緒になって子育てする「共同繁殖」が注目されています。これも意外かもしれませんが、母親以外が子育てに積極的にかかわる動物は、特に哺乳類ではほとんど見られません。父親も、祖父母も、おじ・おばも、子ども（孫、甥姪）の世話にそれほど積極的ではない。チンパンジーもその例外ではありません。

ところが南米に住むタマリンやマーモセットといった新世界猿は、共同繁殖することが知られています。そこで彼（女）らの行動を調べてみると、チンパンジーよりもずっと協力的であることが分かってきたのです。そこから、共同繁殖する動物（人間やタマリン）では協力性が進化する。すなわち家族の「きずな」から「徳」が進化したのではないかと考えられているのです。ハーディ博士の講演は、母性を研究してきた霊長類学者の視点から、こうした一連の研究を概論したものでした。

自分も父親として子育てにかかわるようになって数年。私はハーディ博士の話にすっかり感銘をうけていました。ところがその日の午後のことです。昼食後の講演は、ティム・クラットン＝ブロック博士。動物行動学の大家として知られる博士の講演もまた、人間の協力性の進化にかんするものでした。そこで博士はこう言ったのです（意訳です)。「朝の講演でサラ（ハーディ博士）は、共同繁殖が協力性を進化させたと言った。でもちょっと待ってほしい。逆の可能性も考えるべきなんじゃないか？　協力性の高い動物だからこそ、人間は共同繁殖ができるんじゃないだろうか」。そして博士は、自説を支持する大量の研究データを披露して見せたのです。

たしかに「共同繁殖する動物は、協力的である」という事実からは、どちらが原因でどちらが結果なのか、鶏が先か卵が先か、簡単には結論づけられません。「ティムの話ももっともだよね」「でもサラの話だって説得力あった」。その日の夕方、学会参加者の感想はさまざまでした。そうした様子をみて私は、これこそ科学の醍醐味だなと、軽い感動を覚えました。

どんなに有名でどんなに優れた科学者であっても、間違うときは間違う。だからこそ、自分が結論に至った道筋をすべて明らかにして、皆の意見を聴き、正面から議論する。それが科学という営みだと私は思います。「徳」をめぐる２人の対決は、南仏の青空の下、科学の姿をすがすがしく体現したものでした。

研究プロジェクト

感情・認知機能におよぼす他者・モノの影響

吉川左紀子（こころの未来研究センター長）

■プロジェクトの目的

他者に見られることや他者の存在によって、人のこころの状態や行動は大きな影響を受ける。それは、目の前にある課題に対する集中力を低下させるといった負の影響を及ぼすこともあれば、逆に注目されることによって認知機能が促進され、課題の遂行成績が上がる場合もある。また、仏像のように、実際の人ではなくモノであっても、その存在が人の注意をひきつけ、ときには畏怖や安堵の感情を引き起こして、人の認知、感情、行動に持続的な影響を及ぼすことがある。さらに、心理臨床のカウンセリングでは、クライエントの描画や箱庭作成過程を「見守る人」の重要性が、古くから経験的に知られている。このプロジェクトでは、こうした、人のこころや行動のさまざまな側面に及ぶ他者・モノの影響について、認知科学、臨床心理学、リハビリテーション学などさまざまな視点から具体的に明らかにすることを目指している。以下に紹介するのは、「課題に直接関係のない、周辺にある笑顔が、ターゲットの検出と判断を、非常に早い時間帯で促進する」ことを実証した認知科学分野の研究である。この研究は上田祥行研究員が担当した。

■周囲にある笑顔がパフォーマンスを高める

パソコンを用いて視覚探索課題を行い、モニターの周辺部に提示される、課題には無関係な表情写真が、視覚探索課題のパフォーマンスにおよぼす影響を調べた。今回用いた視覚探索課題は、モニター画面の中央部に提示されるたくさんのLの文字の中からTの文字（ターゲット）をできるだけ早く探す、という課題で、実験参加者は、ターゲットを見つけたらすばやく反応キーを押すように教示された。

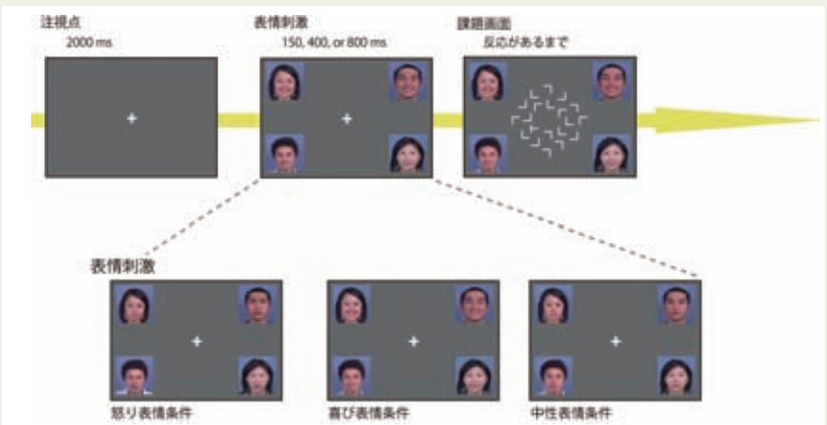


図 1　視覚探索課題の 1 試行の流れと各条件の模式図

この実験のポイントは、視覚探索課題の刺激が提示される前に、モニターの 4 すみに表れる、怒りや喜び、あるいは中性の表情写真にある（図 1）。これらの表情写真は、課題とは直接関係のない情報なので、ターゲットを素早く見つけて反応キーを押すためには、写真を無視してモニターの中央部に注意を集中する必要がある。このとき、表情写真はターゲットに対する反応時間にどんな影響をおよぼすのか、単純に考えれば、課題に対する注意を逸らすような周辺の表情写真は、反応時間を「遅くする」と予想されるだろう。

では、結果はどうなったのか。図 2 は怒り、喜び、中性の表情写真が表れる、それぞれの条件での視覚探索課題の反応時間で、数値が小さいほど課題に対するパフォーマンスが効率よく実行できたことを示している。図 2 をみると、探索刺激よりも800ミリ秒前に、喜びの表情写真が呈示されたとき、反応時間が短くなっていることが分かる。こうした促進効果は、怒り表情や中性表情ではみられない。この結果は、周辺にある「喜び表情」、つまり知覚者に快の感情を喚起させる表情が、800ミリ秒というごく短い時間で、注意のプロセスに促進的な影響をおよぼしたことを示している。

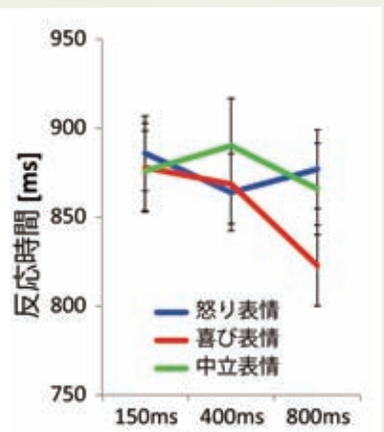


図 2　視覚探索課題の反応時間

当初、課題に無関連な周辺の表情写真は、課題に対する注意を逸らし、パフォーマンスの効率を下げるのではないかと思われた。ところが、予想に反して、喜びの表情写真は、逆に反応を促進することが分かったのである。さらに次の実験では、モザイク画像など、表情写真以外の条件も加えて検討した。その結果、喜び表情による視覚探索時間の促進は、表情以外の画像との比較でも確認された。今後、促進効果の生じる仕組みについて、眼球運動の計測結果などを手がかりにさらに検討してゆく計画である。

研究プロジェクト

共感的対話の相互作用性

吉川左紀子（こころの未来研究センター長）・長岡千賀（こころの未来研究センター研究員）

■目的

人は、心理療法のカウンセラーと対話をすることで、自分の抱えている悩みを乗り越えることができたり、抱える問題に対する新しい解決法を思いついたり、悩み自体を客観的に捉えられるようになったりする。こうした、話し手の心に変化をもたらす対話、心の成長を促す対話とはどのようなものだろうか。また、カウンセリングのような長期間にわたる対話を動機づける要因は何か、対話が自己認識におよぼす影響はどのようなものか。本研究プロジェクトでは、心理臨床のカウンセリング対話に特に焦点をあて、人間にとって「対話すること」がもつ意味をさまざまな角度から実証的に検討し、明らかにすることを目的としている。このため、次の２つの観点から検討を進めている。

■臨床対話のマクロ的時系列構造の解明

聴き手が心理臨床の専門家（以降、臨床家）である場合と、専門家でない人（以降、非臨床家）の場合に、話し手との対話にはどのような違いがあるだろうか。また、熟練した臨床家と経験の浅い臨床家にはどのような違いがあるだろうか。これらの比較を通して優れた聴き手、上手な聴き手のもつ特性を明らかにすることを、本研究の第１の目的とした。このため、実際のカウンセリングと非常に近い設定で収録されたロールプレイのカウンセリング対話、ならびに高校教師への悩み相談のロールプレイ対話を収録し、話し手および聞き手の発話と沈黙の構造、身体動作の同調性（２者の身体の動きがリズミカルに同期する現象）、発話形式、瞬目、周辺言語（「間」や発話速度など）などの物理量を分析指標として分析を行った。

身体の動きの同調性を分析するために、本研究では、コンピュータによるビデオ映像解析によって身体動作の同調傾向の程度を評価する方法を開発した（小森・長岡、認知心理学研究、2010）。この手法では、同調性がどの程度の強さか（図１における色）、時間経過にともなってどのように変化するか（図１における縦方向の変化）、および誰が他方にどれくらい遅れて動いたか（図１における横方向の変化）を求めることができる。「対話が全体として良い感じで進んだ」と評価された事例（高評価事例）と「対話が表層的で深まらない」と評価された事例（低評価事例）のビデオを素材にして解析した。その結果、低評価事例ではクライエントとカウンセラーの身体動作に同調性がほとんど観察されないのに対して、高評価事例では強い同調性が生じていることが示された。さらに高評価事例では、時間経過に伴って若干同調性の強さは変化するものの、対話中一貫して、クライエントの動作から0.5秒遅れてカウンセラーの動作が生じていることが明らかになった。この様子はカウンセラーがクライエントの語りの流れに「沿う」姿勢を反映していると考えられた。

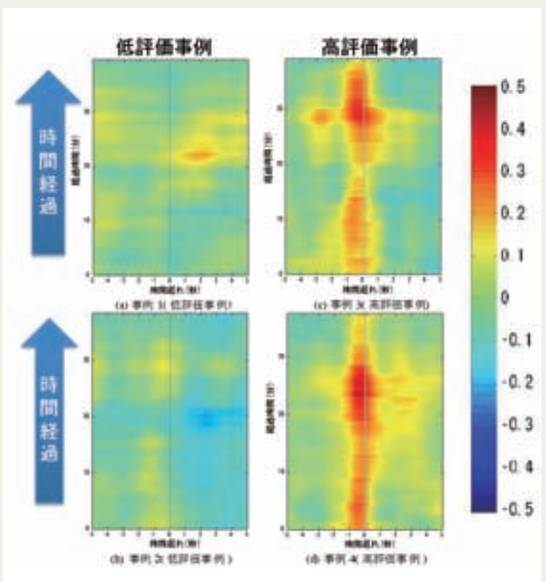


図１　クライエントとカウンセラーの身体動作の同調性

■発話理解における臨床家の専門知

臨床家がクライエントの発話をどのように理解しているのかを調べるために、臨床家群と非臨床家群の実験参加者各々に心理面接ビデオの一部を視聴させ、クライエントの発話内容を再生させる実験を行った。その結果、臨床家と非臨床家の間、および、実践経験が６年に満たない初心者と６年以上の経験者との間に、再生量の相違が認められた。また、再生された内容を分析した結果は、臨床的訓練を受け、臨床経験を積むことによって、専門家としてのクライエントの発話理解の枠組みが作られることを示唆していた。

■今後の展望

これまで得た非言語的行動の定量的データと、クライエントとカウンセラーの発話との対応をより詳細に検討することより、上手な聴き手のもつ特性、ならびに、話し手のこころの変化のプロセスに関して考察するデータを得る。さらに、隣接領域からの批判的見解もふまえ、臨床の「知」に関わる実証研究の可能性と限界について考察する。また、これまで約７年間にわたる一連の成果を統合して書籍として出版し、「対話すること」の意味に関する新たな研究成果を発信する。

研究プロジェクト

社会的ネットワークの機能と性質：「つなぐ」役割の検証

内田由紀子（こころの未来研究センター准教授）・竹村幸祐（こころの未来研究センター特定研究員）

■研究目的

本研究は、人と人とのつながりが形成される過程と、つながりの中でもたらされる社会的サポートの効果の検討を目的としている。本研究では、農業コミュニティにおける社会的ネットワークの構築スキルと、その機能に注目した。日本文化の相互協調的対人関係は、農業コミュニティのあり方をひとつの基盤として形成されてきたと考えられている。そこで、農業コミュニティにおける社会的ネットワークの構築・維持を職務のひとつとする普及指導員の役割に注目し、普及指導員を対象とした調査を実施した。

■背景

農業コミュニティにおいてネットワーク形成を支援することの重要性やそのための普及指導員のスキルについて検討するべく、近畿農政局ならびに近畿ブロック普及活動研究会の協力を得て、2009年度に近畿6府県の普及指導員を対象とする調査を実施した。その結果、普及指導員が実施する多種多様な支援の中でも、関係機関との連携調整や農業者同士の連携の支援など、社会的ネットワークの構築・維持に関わるタイプの支援が特に効果を持ちやすい（農業コミュニティの様々な問題を解決しやすい）ことが明らかにされた。また、こうした支援を行うための普及指導員自身のスキルの獲得に関連して、社会的ネットワークに関係すると考えられる特質（特に、人を育成・統率する力）を持つ「先輩普及指導員」が身近に存在することの重要性が明らかにされた。以上の知見は、農業コミュニティにおいてネットワーク形成を支援することの重要性を示すとともに、そのためのスキルが伝達される条件（具体的には、On the Job Trainingの有効性）に関して重要な示唆を与えている。しかしながら、調査対象が近畿6府県の普及指導員に限定されるなど、大きな限界を抱えていた。

■本年度の調査

そこで2010年度には、全国農業改良普及職員協議会の協力を得て、全国の普及指導員を対象とした調査を実施した。この調査の実施により、主に次の3点が可能となる。第1に、2009年度の調査に参加した近畿の普及指導員にも改めて調査に参加してもらうことで、2009年度から2010年度にかけての時系列変化を検討することが可能になる。これにより、普及活動が農業コミュニティ内の社会的ネットワークの発展に実際に寄与しているかどうかを検討することができる。第2に、全国の普及指導員を対象にした調査の実施により、2009年度の調査で得られた知見が近畿6府県を超えて一般化できるか検討することが可能となる。第3に、これに関連して、地域ごとに異なる効果が得られた場合、その地域に特異的な結果をもたらす条件（地域社会の特徴など、普及指導員の活動にとって環境サイドの条件）の効果を検討することが可能となる。

この全国調査のデータの解析は現在進行形で進展中であるが、上述した近畿調査の知見が全国のデータでも概ね再現されることが確認されている。すなわち、様々な普及活動の中でも、社会的ネットワークの構築・維持に関わるタイプの支援が特に効果を持ちやすいこと、また、社会的ネットワークに関係すると考えられる特質を持つ普及指導員の存在が、本人以外の周囲の普及指導員にもポジティブな影響をもたらすことが確認できている。今後、上述の時系列変化の分析や、地域の特色のもたらす効果の検討など、さらに詳細な分析を進める予定である。

また、2010年度には、全国の普及指導員を対象とした調査だけでなく、他種の公務員（事務職など）を対象とした調査も実施された。この調査は普及指導員を対象とした2010年度の全国調査と比較可能なように設計されている。このデータを用いて普及指導員と他種の公務員を比較することにより、普及指導員の特徴をより明確にすることが可能となる。このデータの分析も現在進行中である。

■対外活動ならびに成果の発表

2009年度の近畿調査の結果は、学術専門誌『社会技術研究論文集』に掲載された（掲載は2011年4月）。ただし本プロジェクトでは、研究成果を学術専門誌に発表することだけでなく、現場の普及指導員に調査結果をフィードバックすることを重視している。そこで、2010年度には、岡山県ならびに山形県にて普及指導員の研修大会に参加し、調査結果をフィードバックする講演を行った。同時に、研修大会にて調査結果に関する質疑応答を行い、現場の普及指導員の視点から本調査の結果がどのように理解されるのか、情報収集を行った。また、同じく調査結果に基づいた論考を普及事業の機関誌である『技術と普及』に掲載するとともに、調査結果の詳細をまとめた報告書をWEB上に掲載し、近畿農政局などの協力を得て広く告知した。なお、2010年度の全国調査の結果から、『技術と普及』の論考は少なくとも1,000名の普及指導員に読まれたことが確認されている。

研究プロジェクト

新人看護師のストレス予防とSOC改善調査

カール・ベッカー（こころの未来研究センター教授）

■背景・目的

看護師という職業には「白衣の天使」といったように患者からすればあたたかなイメージが付与されがちである一方で、現場では沈着冷静な行動が求められるというギャップがある。このようなギャップや、医療や看護に求められる内容と質の刻々とした変化などにより、看護師はバーンアウトが起こりやすいと言われている。バーンアウトはストレスに由来する現象であるが、受け手によってストレスの性質を感じる程度は異なる。

看護師のストレスの予防や軽減のために、これまで様々な教育や介入が試みられてきたが、功を奏しているとは言い難い。そこで、個人のストレス対処能力としてアントノフスキーのSOC=Sense of Coherenceが注目されている。

SOCは3つの感覚にわけられる。第1は、把握可能感＝自分の置かれている状況を理解・把握できるという感覚。第2は、処理可能感＝起こっていることを処理できる、何とかやっていけるという感覚。そして、第3は、有意味感＝日々の営みにやりがいや意味を感じられる感覚である（山崎、2008）。こうした感覚をバランスよく持つ者は、ストレスが強くかかる状況下にあっても、うまく対処できると言える。これまでに、SOCが高い看護師ほどバーンアウトをおこしにくいことが報告されている（Baker, 1997: Tselebis, 2001: 岩谷・渡邉・國方, 2008）。

特に新卒の看護師の場合、学生から社会人への移行と、今までにない経験をすることからリアリティショックが生じ、バーンアウトに陥る傾向がある。看護師のSOC形成（通常、20代で形成されると言われている）においても重要である1年目に着目し、SOCがバーンアウトに直接的に影響を与えるのではないかという仮説のもと、（1）SOCとストレス、（2）SOCとバーンアウト、（3）ストレスとバーンアウトの関係を明らかにしようとした。

■方法

近畿2府4県の全病院に調査協力の依頼を行い、承諾を得られた病院に質問紙を郵送し、病院の各担当者を通じて、研修の場を利用し新人看護師に配布・回収を行った。同一内容の質問紙調査を年4回行い、経時変化を捉える。質問紙の内容は以下の通りである。

1）フェイスシート：年齢、性別、結婚歴、学歴、採用資格、勤務場所、通勤時間・方法、住環境、相談相手、治療中の疾病、ストレス解消手段、食生活、勤務形態等
2）SOC尺度：13項目｛把握可能感、処理可能感、有意味感｝（東京大学大学院医学系研究科健康社会学・アントノフスキー研究会作成）
3）職業性ストレス尺度：仕事のストレス17項目、身体的ストレス11項目（旧労働省委託研究班「職業性ストレス簡易調査票」）
4）バーンアウト尺度：Maslach Burnout Inventory 22項目｛情緒的疲弊、離人化、自己成就｝

4回の調査時期は以下の通りである。

第1回：平成22年4月（卒後・就職直後のオリエンテーション）
第2回：平成22年6月（配属後・3カ月研修）
第3回：平成22年9月（夜勤開始・6カ月研修）
第4回：平成23年3月（卒後1年・1年研修）

現在、第4回目の調査結果が分析されているところであり、結果は第1・2回までのものが詳細に検討されている。

■調査結果

近畿2府4県の全病院1,187件に依頼をしたところ、125の病院から承諾を得ることができた。第1回目・第2回目を通して回答した病院は114件、1,330であった。協力者の内訳は、男性9.2%、女性90.6%、平均年齢は24.1歳である。

最尤法・Promax回転による因子分析を行った結果、既存研究とは異なる因子構成を抽出した。

分析はまだ途中であるが、SOCとバーンアウト、ストレスの関係について報告する。

SOCの自己処理感が高い＝自分の置かれている状況をよく理解・把握し、今後の見通しを立てることができる人ほど、仕事による精神的な疲労を感じることが少ない。また、SOCの有意味感の高い＝自分の日々の生活や行動に価値を見出し、意義を感じている人ほど、自分の能力が仕事に反映され、達成感を感じ、患者に感情移入をした看護を行っているということが分かった。先行研究と同様、ストレス自体がバーンアウトに影響を与えてはいるが、SOCの方がより強く影響を与えていることが示唆された。

■今後の展開

本調査は現在継続中である。今後は、1年を通したSOC、ストレス、バーンアウトの変化と関係、またそれぞれの変化の要因について詳細に検討していきたい。さらに23年度の終了時に再度調査を行い、22年度の新人看護師が3年目を迎えるにあたってどのような心理的変化を生じているかを明らかにしていく予定である。

研究プロジェクト

青年期の社会的適応:ひきこもり・ニートの文化心理学的検討

内田由紀子(こころの未来研究センター准教授)

■研究目的

内閣府の調査では20代~30代の若者の70万人がひきこもり状態にあると推測され、長い場合にはひきこもり期間は実に10年以上と、今や大きな家族・社会問題の1つになっている。こうしたニート・ひきこもりをカテゴリーとしてとらえるのではなく、いくつか共通する心理特性を同定し、スペクトラムとしてとらえ、若者のこころと日本文化との関連を明らかにしようとするのが本研究の試みである。その際には個人内の要因(たとえば精神疾患やパーソナリティに関わる要素)と社会・経済的要因(雇用の不安定さ)、文化的価値観(家族制度、親が子どもの責任をとるべきであるという価値観)の交差点として、ニート・ひきこもり傾向にある人たちの「動機づけ」(どんなときにやる気を持つことができるか)や社会への態度、価値観などに着目した研究を行うこととした。本研究においては社会心理学的・発達心理学的・臨床心理学的、そして実際にひきこもりの問題に携わるNPOの支援者の社会実学的視点により、日本文化、日本社会とひきこもり、ニートの心理傾向とのインタラクションを分析し、さらに、介入方法の効果などを検証した。

本研究は大きく分けて3点挙げられる。(1)当人とその家族の自己や関係性の認知について、質問紙やインタビュー調査を行い、家族関係や家族メンバーの認知構造と社会的役割との相互作用を検討する。その際、NPOなどで支援を受けている人だけではなく、大学に在籍している20代、30代の若者についても同様の調査を行う。(2)社会的要因(日本文化・社会構造)と感情やコミュニケーションの関係について、学生や社会人を対象に検証する。その際、アメリカなど他の地域と比較検討する視点を持つことにより、日本文化の持つ構造と心理状態の関わりについて考察する。(3)NPOなどのひきこもり、ニート支援団体の介入方法を検討する。これらの視点を組み合わせ、社会心理学的に動機づけ、自己観、態度などを分析することにより、日本におけるひきこもりやニートについてどのようにアプローチしていくべきかを検討し、得られた知見をNPO組織や公的機関を含めて、社会に還元していくことが可能になると考えられる。また、アメリカなど他の地域と比較検討する視点を持つことにより、日本文化の持つ構造との関わりについて具体的に考察する。

■平成22年度の研究内容とその成果

NPO団体の協力により、ひきこもり状態にある若者とその家族への調査を行った。調査は2010年4月と8月に実施、支援が与える影響を検討した。また、比較対照群として、大学生データもあわせて収集した。具体的には、前年度に作成した「ニート・ひきこもり尺度(内田・ノラサクンキット、2010)」、感情状態、自己観、親の態度認知、不安感、抑鬱感などを調査項目に含めた。

平成21年度に実施した20代、30代の無職者1000名への調査の分析を詳細に進め、NPOで支援をうけているひきこもり群との比較を行った。

内田・ノラサクンキットによる「ニート・ひきこもり」尺度では、3つの因子が見られる。1つはフリーター生活志向性であり、「職場や仕事で我慢できないことがあれば無理せずにやめた方がいいと思う」といったような態度である。2つめは自己効能感の低さであり、「コミュニケーションをとるのが難しい」といったような自信のなさを表す。3つめは将来に対する目標の不明瞭さで、「将来何をしたらよいのかわからない」という要素である。このような3つの因子により構成される27項目のニート・ひきこもり尺度について調査を行ったところ、ニート・ひきこもり傾向はいずれも学生群で低く、特にニート状態にある人では高い結果になっていた。また、ニート・ひきこもり傾向は、アメリカで優勢な相互独立性、日本で優勢な相互協調性や自己の可塑性の認知(自分は変わりうる、という認知)のいずれとも負の相関を持っていた。つまり、ニート引きこもり傾向が高ければ高いほど、相互独立性も相互協調性も否定するような傾向にあった。日本的な対人関係を断ち切ろうとしているが、アメリカ的な個人主義が実現されているわけでもないという心理状況を見て取ることができる。さらに大学生を対象とした実験研究では、ニート・ひきこもり傾向が高い学生ではある課題に失敗した後に、同じ課題に対して努力をしなくなることが見られた。これはニート・ひきこもり傾向の低い学生では、むしろ失敗した後に成功した後よりも努力をしようとする傾向があることとは対照的であった。

■今後の検討課題

今後はひきこもり状態から立ち直った人への調査などを行っていきたいと考えている。

研究プロジェクト

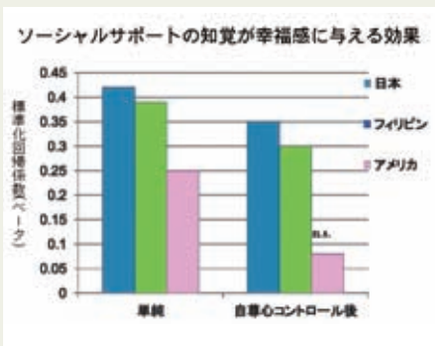
日米における糖尿病患者の心理•社会的側面と療養状況の関連

内田由紀子（こころの未来研究センター准教授）

■研究目的

文化心理学の比較研究の視点により、社会的・文化的な要因が異なれば、そこから得られる幸福感の属性も異なってくることが示されている。たとえば日本文化においては、人は意味ある関係性との結びつきを確認した場合に幸福を感じがちであるのに対し、北米では、人は個人の内的属性の価値を確認した場合に幸福を感じがちであるとされる。この事実は、日本をはじめとするアジア文化が人との円滑な関係に価値を置くのに対して、アメリカ文化は個人の独立に価値を置くという仮説に適合している（Uchida, Norasakkunkit, & Kitayama, 2004）。

たとえば身近な人からのサポートが心身にもたらす効果についての研究はその成果の１つである。当然のことながら、人との結びつきは、欧米においてもストレス軽減に効果があるなど、精神健康と関連すると報告されている（Cohen & Wills, 1985 ; Uchino, *et al*., 1996）。北米ではサポートを受け取ることで「私は周りからも受け入れられる良い人間なのだ」と感じ、個人の自己効能感を維持できるため、精神健康が導かれると説明されるというように、自尊心との関連で語られることが多い。しかし、このようにサポートの効果が自尊心に依存している文化では、逆にサポートが自尊心を傷つけてしまうような場合には、幸福感が得られないという知見も得られている。サポートを受け取るということは時に他者への依存や自分の力不足を示すことになるため、自尊心や効能感を損ない、ネガティブな感情が引き起こされてしまうという。ゆえに周囲からのサポートに気がついている場合より、知らないうちに受け取っている場合の方がポジティブな効果があるという知見もある。このように、自尊心に価値がおかれる文化では、サポートの受け取りが幸福感を高めるかどうかは、いずれにしても自尊心次第といえよう。



幸福感の予測因と文化（Uchida,*et al*.,2008）

これに対して日本などの文化においては、情緒的サポートを受け取ることで周囲の人との結びつきを感じること自体に価値があるため、サポートの受け取りは自尊心が高まるかどうかにかかわらず幸福感を高めるということが示されてきている（Uchida, *et al.,* 2008）。

このような文化心理学的知見は、実際の身体健康の維持や、病気に対する療養行動にどのような効果を持つのかは明らかではなかった。この点について、特に糖尿病の療養行動に着目し、医学と連携して日本的な療養のあり方について検討するのが本研究の目的である。

糖尿病患者には、食事療法・運動療法が行われ、患者個人の努力や療養行動へのコミットメントを必要とするものとされている。それを支えるものとして療養指導は重要な役割を担っている。しかし日本の療養指導の現状においては、アメリカの療養指導士の９割が用いている「エンパワメント理論」がベースになっているという。患者自らの主体性と自己決定を促し、療養への動機づけを高める方法として知られるエンパワメントは、「相互独立的」で個の主体性を重視するアメリカに特徴的な指導方法といえる。しかし上述のように、日本における動機づけや自己観のあり方がアメリカとは異なるのであれば、この方法のあり方については検討する必要がある。そこで本研究では、エンパワメントで重視される「自己効能感」と、日本的幸福感を支える「情緒的サポートの知覚」が療養行動にもたらす効果について検討を行った。

■平成22年度の研究内容とその成果

京都大学にて、日本人２型糖尿病患者154名の心理社会的側面、療養行動、自己効能感、情緒的サポートについて調査を行った。また、アメリカ・デラウェア大学にて、同様の調査を行った。アメリカのデータについては現在まで25名分のデータが収集されており、現在も継続中である。日本人患者・アメリカ人患者とも年齢は60歳前後が多く、学歴も14年が平均、糖尿病歴は平均10年程度と、比較可能なデータ群であった。主な結果としては、①日本においては全般的に、情緒的サポートをより強く知覚しているほど、糖尿病負担感が低く、療養行動の遵守傾向も高い、②特に、日本においても相互協調性（人との結びつきを重要視する程度）が高い群において、情緒的サポートの効果が強い、③アメリカでは情緒的サポートと療養行動遵守傾向の関連が見られず、自己効能感との関わりがとても強いという、仮説に合致した結果が得られた。

これらの知見をもとに、今後の日本の療養指導の方針について具体的な検討を行っていく必要があると考えられる。

研究プロジェクト

ものへの依存・人への依存

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

■依存の研究と社会の変化

依存に関する心理学的研究としては、様々な視点からの研究が行われてきた。発達心理学の方からは、母親に依存するというあり方から自立へというプロセスでの研究がなされてきた。社会心理学的には、依存というものに対して、文化差という視点での研究がなされてきた。たとえば西洋人に比較しての日本人の依存性の高さもその1つで、土居健郎による「甘え」という心性も、そのことに関係していると思われる。また臨床心理学は、人に対する依存に関連する問題と同時にaddictionなどの依存の問題に取り組んできた。

近年、ネットゲームにはまる事例報告が増えている。これはゲームというものに依存しているのであろうか、それとも対戦相手という人に依存にしているのであろうか？　本プロジェクトでは、ものへの依存と人への依存という視点で、依存についての総合的な心理学的研究を行っていく。そのことにより、社会的きずなが弱まってきているとされる現代社会において、人への依存はどのように機能し、またものへの依存が強まっているのか、その相互の関係はどのようになっているのかを検討していくつもりである。この研究は、現代におけるこころのあり方へのアプローチとして、重要な視点となりうるはずである。

■ものと人の接点：移行対象

2010年度では、ものへの依存と人への依存の接点になる現象と思われる「移行対象」(transitional object)について、黒川嘉子(佛教大学)を招いて研究会を行った。

移行対象とは、特定のものに強い愛着を示し、就眠時や外出時に肌身離さず持とうとする乳幼児によく見られる行動(図1)に対し、D.W.Winnicott (1953)によって概念化された。ほどよい母子関係を基盤として、母親を象徴的に代理し、主観的現実と客観的現実のあいだの中間領域での体験を可能にし、自らを慰める(soothing)ものとして、絶対的依存から相対的依存、そして独立に向けてという発達過程において、その移行を助ける健康で普遍的なものであると考えられた(図2)。確かに、乳幼児にとって、特定の愛着物を持つことは、象徴機能の発達、心理的支えとして機能しているが、欧米圏において、移行対象発現率が60～90％と高率であるのに対し、日本においては約30％であり、添い寝などの就眠様式や身体接触の多い養育行動をとる文化圏において発現率は低く文化差が大きい。

黒川(2004)においても、移行対象発現率は33.4％であったが、就眠時に移行対象を持ちつつも同時に母親の存在を必要としている子どもが43.3％もいること、また、移行対象を必要としなくなった子どもでも母親の添い寝を求めるなど、依存の対象が「母親」から「特定の愛着物」へという1方向では考えられないことが示された。また、そこでは、母親の存在の有無が問題となるのではなく、母親の身体をいじったり、絵本読みやお話をする、抱きしめるなど、その親子の中でユニークな関わりが創り出されており、依存するために母親という「人」が必要か、特定の「もの」が必要かという選択ではなく、「人」と「もの」が重なり合い、共に体験しながら1人になる、1人で体験しながら共にあるという逆説が成り立つ体験の重要性が明らかになった。こうした乳幼児期の子どもや母子の関わりから、「個」としてのあり方や母子分離に代表される「分離」のとらえ方、「もの」に対する所有の感覚やアニミズム的思考という依存の背景についてのテーマが浮かび上がってきた。

図1　A.A.ミルン著、石井桃子訳『クマのプーさん』(岩波書店)　クマのぬいぐるみをいつも手放さないクリストファー・ロビン

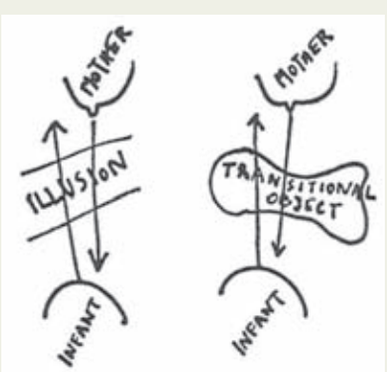


図2 Winnicott(1953), Transitional objects and transitional phenomena: A study of the first not-me posession.

研究プロジェクト

発達障害への心理療法的アプローチ

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

■はじめに

発達障害に関しては、近年脳科学による研究が進み、またそれに伴い、薬物療法と訓練教育が中心的な対応になりつつあり、心理療法はあまり有効でないとさえ考えられている。しかしながら、子ども・大人の発達障害に対して、心理療法による成果もあがっている。そこでこのプロジェクトでは、発達障害への心理療法的アプローチは有効なのか、またそうならばどのようなアプローチの仕方が大切なのかをさぐっていくものである。

■事例のエッセンスの検討

研究の１つとして、様々な発達障害の事例検討を繰り返すなかで、発達障害の特徴と、それに対する心理療法のエッセンスを把握することを行った。

その中で「主体の欠如」というのが重症から軽症までの発達障害の中心的な特徴として浮かび上がってきた。つまり主体が確立されていないから、重症の場合には言語が獲得されなかったり、他者との関係が持てなかったりする。軽症の場合にも、他者との距離のなさや直接性としてその特徴が現れてくる。

従来の心理療法は主体を前提として、内省を求めるために、発達障害への心理療法は通用しなかったと考えられる。これに対して主体のない発達障害では、主体の発生に立ち会うような関わりが必要になってくる。子どもの場合、治療関係あるいはイメージ表現における「結合と分離」が主体の発生に重要であることがわかってきている。大人の発達障害に関しては、クライエントの内省を促すような関わりではなくて、「ぶつかる」ということが主たるポイントとして浮かび上がっている（河合俊雄編『発達障害への心理療法的アプローチ』創元社、2010）。

河合俊雄編『発達障害への心理療法的アプローチ』（創元社）

畑中千紘『話の聴き方からみた軽度発達障害』（創元社）

■心理テストによる検討

発達障害の特徴をつかみ、その臨床場面での現れ方を具体的に捉えるため、ロールシャッハ・テストと話の聴き方の分析を行った。その結果、発達障害群は刺激への反応が薄く平面的で、外的現実と内的感覚を区別なく体験していることが特徴的であった。コミュニケーション障害は発達障害の主要特徴として指摘されているが、その基盤には相手の言葉と自身の印象や記憶を同一平面上で捉えるあり方がみられることが明らかとなった。一方、こうした特徴は空虚な反応の量産、表面的模倣の多用、対象の特徴と主観的記憶との混在等、実際の対話場面での現れ方は非常に多様であることも明らかに示された（畑中千紘『話の聴き方からみた軽度発達障害』創元社、2011）。

■センターにおけるプレイセラピー

既に行われた事例の検討だけではなくて、センターのプレイルームを用いて、発達障害の子どもに心理療法を実施して検討する研究を開始した。発達障害と診断された子どもに対して、まず発達検査を実施し、６カ月の心理療法を無料で行って、再び発達検査を実施して比較し、継続を希望する場合には引き続き有料で心理療法を続ける研究をはじめている。

■発達障害と現代の意識

発達障害の増加は、現代における症状や意識の変化と関連しているのではないか、という視点からも研究している。つまり対人恐怖を代表とするような自己意識の問題である神経症が減少し、直接性を求め、内省しないあり方が増えているのである（『発達障害への心理療法的アプローチ』）。

研究プロジェクト

発達障害と読み書き支援

吉川左紀子（こころの未来研究センター長）・小川詩乃（こころの未来研究センター共同研究員）

■目的

発達障害児は固有の学習困難を持つと考えられているが、その認知的な機序は明らかではなく、その支援は急務である。本プロジェクトでは、「読み書き」という切り口から、発達障害児への支援とその認知特性を検討することを目的としている。2007年からこれまで、学習に困難を持つ発達障害のある小学生（延べ31名）を対象として継続的な学習支援に取り組んできた。2010年度においては、これまでの活動を踏まえて、研究成果として社会に発信していくことを目的として、いくつかの新しい取り組みを行った。

■学習支援の体制

これまで23名の発達障害児に対し週１回の学習支援を行ってきた。その結果、読み書きを始めとする学習面での向上がみられることが分かった。一方で、週１回の支援には時間・人手などのリソースが多く必要であるため、その対象は比較的少数の児童に限られてしまう。このことは、地域での活動に本プロジェクトの方法を応用する際に制約になる。

そこで、支援の効果を維持しながらより多くの児童が参加できる体制を構築する目的で、2010年度は隔週の支援に頻度を減らしてその影響を検討した。同時に、新たに８名の小学生を月１回支援する形で受け入れた。これらの試みにより、児童への学習支援に加えて、保護者の児童理解をサポートすることの重要性が浮き彫りになってきた。発達検査などの結果を保護者に伝え、児童の学習困難に関する理解を促し、それを家庭での児童への接し方や勉強の教え方に反映できるように具体的なアドヴァイスを行うことが児童の支援につながると感じられた。特に、発達療育室での支援の機会が少ない場合には、保護者の児童理解を促進することの重要性が増すと思われる。このことを検討するために、定期的に保護者への質問調査を実施し、保護者への積極的な情報提供や話し合いが児童理解にどのような効果をもつかを時系列的な変化を追うことで明らかにしたいと考えている。

児童への学習支援の様子

■発達障害特性チャート MSPAの実施

連携研究員の船曳ら（2011）によって開発されたMSPA（Multi-dimensional Scale for PDD and ADHD）を４名の児童に実施した。本研究プロジェクトは、学習困難を抱える児童を対象としているが、参加している児童の特徴は非常に多様であり、学習困難の原因も様々である。これまでは、主に児童の認知機能に焦点を当ててきたが、学習の困難には、社会性や感情、こだわりなどより幅広い要因が影響していると考えられる。MSPAを導入することにより、これまで学習支援を行う中では捉えにくかった、ひとりひとりの子どもの認知、感情、行動の特徴をより明確に捉えることができるようになった。これにより、より児童の特徴に合った学習支援を考える有効な手掛かりが得られた。今後、本チャートの各項目の値と学習の困難さとの関係を検討していきたい。この成果の一部は、第52回日本児童青年精神医学会総会において発表した。

保護者への説明とサポート

■自閉症スペクトラムの特性の検討

これまで、本プロジェクトでは、読み書きの苦手さを評価する課題を実験的に検討することを１つの目的としてきた。しかし、本プロジェクトの参加児童の半数以上は自閉症スペクトラムであり、それらの児童の学習困難と、自閉症スペクトラムの特性は切り離せないと考えられる。このため、行動観察に基づいて自閉症スペクトラムの対人コミュニケーション行動を評価することを試み、学習支援中の児童の表情や、離席の様子を捉えるために、ビデオカメラを新たに２台導入した。今後この内容を分析して、学習支援につなげていきたい。

■今後の展望

今後も実践としての学習支援活動を継続していくとともに、多様な視点を取り入れて支援効果の実証研究に取り組んでゆく。

研究プロジェクト

こころの研究ニュースの発信:こころ学ブログ

平石　界（こころの未来研究センター助教）

■プロジェクトの目的

「こころは目で見ることも、触ることも、長さを測ることもできない」。はじめて聴いた心理学の講義でそう言われたときに、いたく感心したことを覚えています。確かに「こころ」は物理的なモノではありません。ずいぶんと曖昧模糊とした存在です。それにもかかわらず、私たちはしばしば、自分のこころが分かっている気になります。時には他人のこころが分かった気になったり、他の動物のこころが分かったような気になることすらあります。どうして人間はこうも簡単に「こころ」を分かったような気になるのでしょうか。そしてまた、本当に私たちは「こころ」を正しく理解しているのでしょうか。こうした疑問は、文字に残っているだけでも数千年、おそらくはそのずっと前から、人間のこころを悩ましてきたものではないかと思います(というふうに、昔の人のこころが分かるような気持ちがしてしまったりするのです)。

心理学は、この「こころ」という厄介な対象に、可能な限り客観的に、科学的にアプローチしようとする学問です。そのために研究者は数々の工夫を凝らし、実験に参加してくださる方々にトリックをかけ、煙に巻き、時に自分が煙に巻かれ、そうして苦労して、少しずつ「こころ」にかんする研究を積み重ねてきました。本プロジェクトは、そうした心理学(および関連領域)の研究者たちによる研究論文をひもとき、固い論文の行間から彼らの苦闘と遊び心を読み取り、皆さんに紹介しよう。それで心理学をもっともっと楽しんでもらえたら、との意図で発進したものです。

どの論文を紹介するか。どうやって紹介するか。執筆者たちに敬意を払い、読者の方々に間違った情報を伝えることのないよう、論文を精読し記事を書くという作業は、当初思っていたよりも、はるかに困難なものでした。それでもようやく22本の記事を書くことができました。また2010年度からは、twitter用の「つぶやく」ボタンも設置しました。地道に着実に、記事をアップしていきたいと思っていますので、今後とも「こころ学」をどうぞご贔屓に。

■2010年度の記事から

2011年1月13日掲載の記事「上目遣いと女っぽさ」より一部をご紹介します。

＊

皆さん、写真うつりを良くするために、どんなことを気をつけていますか?

にっこり笑うとか、目力を込めるとか、人によりさまざまな戦略があることと思います。今回は、どんなポーズで写真を撮ると魅力的にみえるか?という研究を紹介してみましょう。

ただし、効果は女性限定です。

と、もったいつけてみましたが、おそらく大半の女性はすでにご存じのことかもしれません。

「うつむき加減から上目遣い」

だそうです。

心理学の研究を見ていると「そんなこと、知ってた」という現象が報告されていることが少なくありません。「別に大真面目な顔して“研究”とか言わなくても、そんなの分かってた」という研究。今回のも、そういうものと言えば、そうかもしれません。

しかし一方で、心理学の歴史は、人間の“直感”とか“常識”が、いかに間違いやすいものであるかも、繰り返し示してきました。だから「そんなん知ってる」という話であっても、やっぱり大真面目に科学的に研究をしてみる価値はあるのだとヒライシは考えています。

それじゃ「上目遣いすると可愛く見える」という“当たり前”を、研究者はどうやって科学したのでしょうか。

研究したのは、オーストラリアのニューキャッスル大学のDarren Burkeさんと、同じくオーストラリアはMacquiarie大学(マケーリー大学と読むのでしょうか)のDanielle Sulikowskiさんです。2人は「顔の垂直方向の傾き」が、魅力度、女っぽさ、男っぽさにどう影響しているのかを調べました。

PCの性能向上と、それにともなう各種のソフトウェアの開発が進んだおかげで、現在では、顔写真を加工することがとても簡単になりました。という話は以前にもしました。Burkeさんたちも、こうした恩恵をフルに使って研究をしています。彼らはFaceGenというソフトを使って、同じ人の顔写真を、いろんな傾きかげんに変えて、それで魅力度とか女らしさ／男らしさがどう変わるのか調べたのです。

＊

……つづきはWebサイト上でご確認ください（http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/kokorogaku/）。

研究プロジェクト

「社会的こころ」の多様性の進化的・遺伝的基盤に関する研究 ――双生児法による

安藤寿康（慶應義塾大学文学部教授）

■目的

ヒトは、進化の過程で社会的な役割分担や互恵的利他性などに基づく「社会的こころ」を獲得してきた。近年「社会的こころ」の多様性（個人差）が、生物学的人間研究の視点から注目を浴びてきている。本プロジェクトは「社会的こころ」の形成過程とその多様性を支える、進化的・遺伝的基盤について、双生児法を用いて実証的に明らかにすることを目指した。具体的には、慶應義塾双生児研究プロジェクトが過去10年わたって収集してきた約1000組の双生児の縦断的データベースの中から、「社会的こころ」に関連する諸変数（協力行動、共感性、認知能力、パーソナリティ）を取り上げ、それら諸変数間の遺伝的・環境的関係を多変量遺伝解析によって解析し、進化的・遺伝的な基盤の統合的なモデル構築を試みた。

■青年・成人期の認知能力の遺伝的安定性と変化

青年期から成人期にかけては、児童期と比べて社会への参加の程度が大きく変化する。一方でこの期間は知的能力が大きく伸び、受験などの形で競争圧力も大きくかかる時期である。こうした時期における一般認知能力の変化と安定性に、遺伝および環境要因がどのように影響しているのだろうか。

7年の間隔（1998／99年と2005／06年）を開けて同じ双生児協力者から収集した言語性・空間性IQスコアを分析したところ、2つの時期には共通の遺伝要因が影響していたことが明らかとなった。つまり青年期から成人期にかけて、一般認知能力の個人差には、同じ遺伝要因が影響していることになる。もちろんこの期間に一般認知能力がまったく変化しなかったわけではない。むしろ、変化は主として環境要因、それも家族外での環境（非共有環境）によって説明されることが明らかとなった。青年・成人期における家庭環境・社会環境の影響力を考える上で、深い示唆の得られる結果であった。

■社会的ジレンマ・ゲームでの行動の遺伝環境分析

社会的ジレンマとは、メンバー全員が協力することがグループ全体への経済的利益をもたらす一方、個々人にとっては協力しないことの方が利益が大きい状況を言う。例えば二酸化炭素排出などの環境問題も、社会的ジレンマの1つといえる。実験室での社会的ジレンマ“ゲーム”では「常に協力」「他人が協力するなら協力」などの個人差が見られる。この個人差には、どのような要因が影響しているのだろうか。

双生児協力者に、「他人の協力度が分かる時にどう振る舞うか」回答してもらう実験を行いデータを分析した。結果、他者の協力度が高いと分かっているときの回答ほど、遺伝の影響が大きかった。

社会的ジレンマにおいて、敢えて不利益を甘受する傾向（協力性・利他性）がどのように進化してきたのかは、生物学的人間研究における大きな問いとなっている。さらにデータの精密な分析を進めたい。

■共感性形成要因の検討

他者への思いやりや理解といった共感性は、社会性の進化において大きな意味をもってきた。一方で共感性にも個人差が存在する。成人の双生児協力者を対象に、共感性と、子ども時代の親の養育態度（回想）について質問紙調査したデータを分析することで、共感性の多様性の基盤を探った。

親が情愛深い家庭環境で育った人は、高い共感性を成長させるのだろうか。データはこの予測を支持しなかった。共感性と養育態度は相関していたものの、両者は主に遺伝要因によって繋がっていることが示唆された。

それでは家庭環境は共感性の発達に何ら影響を及ばさないのだろうか。さらにデータを分析したところ、親の情愛深さが極めて高かった、または極めて低かった場合には、共感性の発達に家庭環境が影響することが明らかとなった。つまり、平均から大きく外れる家庭環境は、個人の発達に影響することが示唆された。

■まとめ

双生児データなどを用いて遺伝と環境の影響力を探るアプローチ（行動遺伝学）は、「遺伝率が何％」といった単純な研究を超え、遺伝と環境の交互作用まで踏み込み、個人の発達のより詳細なプロセスを記述しようと試みている。研究をさらに進めることで単純な遺伝決定論が誤りであることを示してゆきたい。

研究プロジェクト

利他主義の進化認知科学的基盤

小田　亮（名古屋工業大学大学院工学研究科准教授）

東日本大震災の被災者に対する大規模な募金活動やボランティア活動にもみられるように、ヒトは非血縁の他者に対する利他主義が発達している動物である。このような高度な利他性は、どのような至近的要因によって支えられているのだろうか。本研究プロジェクトでは、ヒトの利他性を支えている認知特性について、進化生物学的な観点から実験的に探ることを目的とした。

■利他的行為を促進する要因の実験的検証

ヒトの利他性を実験的に検証する方法として、独裁者ゲームがある。いくつかの先行研究によって、独裁者ゲームの際に目の絵や写真を分配者に見せると、分配額が増えるという報告がなされている。これは目の絵が分配者の「見られている」という自意識を高めるからではないかといわれている。そこで、目の絵の代わりに鏡を用いて独裁者ゲームを行い、分配額の増減と、分配者が何を考え、どう感じていたのかを調べた。

実験参加者は京都大学の日本人学生であり、分析に使用したのは55名（男性22名、女性33名）である。参加者は、実験室の鏡に姿が映っている条件（鏡条件）と、鏡が裏返されている条件（対照条件）のどちらかに割り振られた。参加者は全員分配者になるように工夫がされた。参加者は、実験者から与えられた100円硬貨７枚を、この実験に参加した別の被験者に好きなだけ分配してくださいと教示され、分配を行った。分配は完全に匿名で行われることを強調した。分配の後に、分配の際に何を考え、どう感じていたのかについての17項目の質問、自意識尺度、他者意識尺度、向社会的行動尺度などの個人の性質を測る質問に答えてもらった。

分配額には鏡条件と対照条件とで有意な差はみられなかった。17項目の質問について主成分分析を行うと、５つの主成分が抽出できた。鏡条件と対照条件とで主成分得点に差がみられたのは、そのうち主成分１のみであった。負荷量から、主成分１は他者の目を気にする程度を示すと解釈でき、分配者は鏡があると他者の目を気にするようになることが分かった。しかしながら、主成分１の得点は分配額とは相関がみられず、他者の目を気にする程度は分配額には影響しないことが明らかになった。一方、分配額との有意な相関がみられたのは主成分２のみであり、主成分２は互恵性への期待と関連している成分であることから、独裁者ゲームにおける分配に影響しているのは、互恵性への期待であることが示された。

■利他主義者の顔の記憶と行為の記憶についての実験的検証

利他行動に限らず、社会行動には一般的にやり手だけでなく受け手がいる。利他行動の受け手側としては、自分にとって利他的に振る舞った人をそうでない人よりもよく記憶していると、次に交渉の機会があったときにその相手を優先的に選ぶことによって、互恵的な関係を築くことができる。このことから、ヒトは利他的な人をそうでない人よりも無意識によく記憶しているのではないかということが考えられる。そこで本実験では、参加者に顔写真を相手にした分配委任ゲームを行ってもらい、その後顔写真の記憶を調べることにより、顔記憶のバイアスについて検証した。

実験参加者は京都大学の日本人学生であり、分析に使用したのは48名（男性20名、女性28名）である。24枚（男性12枚、女性12枚）の顔写真を相手にモニタ上で分配委任ゲームを行ってもらった。１度の分配委任ゲームに使用する金額は30円で、顔写真の分配金額は30円、20円、10円、０円がそれぞれ男女３枚ずつになるよう、実験者が決定した。参加者はランダムに示されるモニタ上の顔写真の相手に分配を委任するかどうかを決定する。分配を委任した場合には、30円のうち相手が分配すると答えた金額を獲得でき、委任しない場合には全額の半分以下である10円を確実に獲得できる。分配委任ゲームの後、５分間のインターバルを挟み、顔と分配金額の再認を行う。モニタ上にランダムに示される顔写真が、分配委任ゲームに出てきたかどうかと分配委任ゲームでいくら分配したかを尋ねることで、利他主義者と非利他主義者のどちらがより記憶されているのかを検討した。

顔の記憶率と分配金額の記憶率を顔写真の性別と分配金額の８カテゴリーに分けて求め、被験者内要因を顔写真の性別、顔写真の分配金額、被験者間要因を被験者の性別として、３元配置分散分析を行った。分析の結果、分配金額の記憶には性差があることが分かった。男性は分配金額が０円の女性をより記憶しており、異性の非利他主義者に対して非常に敏感であると考えられる。また、女性は性別に関係なく分配金額が０円の非利他主義者と、30円の利他主義者についてより記憶していた。なぜこのような性差がみられるのかについてのさらなる分析が、今後の課題であるといえる。

研究プロジェクト

こころと身体をつなぐメディアとしての味覚研究：食の「質」をふまえた食教育の検討

荒牧麻子（女子栄養大学調理文化研究室非常勤講師）

■2年目の活動

2年目となる活動は以下の流れに沿った研究報告、海外学術交流、プロジェクト紹介を行った。

1）海外における味覚研究、味覚教育の理論と実践についての先行研究を消化するため研究会を行い、日本の子どもの「食育」の現状を世界の食教育の中に位置付けることを試みた。味覚の発達に関する基礎研究と味覚教育の方法論は、ヨーロッパ、とりわけフランスとイタリアで進んでおり、認知・発達心理学、栄養学、行動学、言語学、農学の学際的基礎研究に基づいた「味覚教育」が公立学校の教育現場において20年以上にわたって実践されているだけでなく、それが児童・生徒のその後の味覚形成に及ぼす影響について、豊富な実験資料が蓄積されている。そこでは、子どもの食行動を心理学、発達心理学、行動学、言語学的な側面から複眼的に研究されているが、われわれの目から見て抜けていると思われたのが生態学的視点と心理プロセスを念頭に置いた社会学的視点であった。

2）単純な質問紙調査が難しい幼児・児童を対象に、味覚をはじめとする感覚価値に関する質的研究をどのように進めることができるか、野外霊長類学や生態人類学の培ってきた行動・生態観察や動物心理学的手法を参考にしながら検討した。

■研究会開催及び報告会の実施概要

- 2010年5月15日（土） 前年度の活動報告と新たな研究課題の意見交換会開催（東京） 参加者：鎌田、山内、川村、藤原、大石、荒牧
- 2010年7月3日（土） 研究報告会開催（東京） 参加者：鎌田、山極、山内、藤原、荒牧

テーマ「食の質を問う」を各人の研究フィールドから話題提供

- 2010年7月7日（水） 篠山フィールドでの野外活動研究の継続について意見交換（京都） 参加者：布施、荒牧
- 2010年9月発行 定期刊行物『こころの未来』vol.5に当研究プロジェクト概要紹介
- 2010年9月12日～18日 国際霊長類学会への参加（京都）
- 2010年11月11日（木） 鎌田教授研究室主催「こころ観研究会」への参加（京都） 荒牧
- 2011年2月7日（日） 研究報告会開催（東京） 参加者：鎌田、山内、藤原、布施、大石、荒牧

以上は国内での実施状況。この他メンバーによる海外学術交流については、2010年12月に掲載発表を行ったポスターを参照されたい。

■研究報告と参加報告

研究報告1） 野外霊長類学や生態人類学の培ってきた行動・生態観察についての手法

山極寿一 話題：「サルは何を食べてヒトになったか」「ヒト科霊長類の進化と社会生態学的多様性」「リチャード・ランガム著『火の賜物 ヒトは料理で進化した』の紹介」

山内太郎 話題：「近代化・都市化―の混乱と食事変化」パプアニューギニア高地フリ語族の農村居住者と都市移住者の比較研究

研究報告2） 日本の食の近代化で「見失ってきたもの」についての考察 鎌田東二 話題：「宮澤賢治」の作品に見る「食」の位置付け、日本人の宗教観、子どもの純正を保つために大人ができること、すべきことへの問題提起

藤原辰史 話題：「食の“質”を問うとはどういうことか」ドイツにおける「かまどHerd」の思想 ナチスにおける食の政策、貧民窟の生活（日本）

松原岩五郎著『最暗黒の東京』の紹介

誰が、どういう資格で人の食の「質」を問うことができるのか

研究報告3） 篠山チルドレンズミュージアムにおいて、「ごんた山と塩むすびワークショップ」を2009年8月の5日間実施した研究データー解析と中間報告 布施未恵子

参加報告1） センター関与の研究会

矢野智司（京都大学大学院教育学研究科教授）「人間の心を生かす他者としての動物――文学作品を通しての動物――人間学のレッスン」

臨床教育学の立場から、絵本による「こどものこころの形成」を論じる

参加報告2） 海外研究機関との連携・共同研究

荒牧麻子 訪問先「ヨーロッパ味覚科学研究センター」「PARIS味覚研究所」「小学校授業参観」 15カ月に及ぶ子どもの味覚教育に関する比較研究の研究者発表会参加 食教育は①学校の授業、②家庭、③学校食堂の順で効果が認められたとの中間報告があった。

大石高典 訪問先「(A)フランス国立パリ自然史博物館」「(B)リヨン第2大学言語ダイナミクス研究所」「(C)マックスプランク鳥類学研究所人間行動学部門」（渡航・滞在は別財源による）

「中部アフリカ三カ国（カメルーン、コンゴ、ガボン）の熱帯森林地帯に居住するバクウェレ人諸集団の言語、環境利用と食、社会関係と儀礼、遺伝的類縁関係の比較と文化進化」について、フランス、ガボンの研究者らと国際共同研究に関する打ち合わせを行った。

人間行動学的手法により集められた映像資料を用いての世界各地の子どもの食の分配行動の比較研究の可能性について共同研究者と議論を行った。

研究プロジェクト

認知的文化差異の基盤に関する研究：調整型•影響型対人関係の役割

宮本百合（ウィスコンシン大学マディソン校心理学部助教）

■プロジェクトの目的

物をどのように知覚するかには個々人によって違いがある。例えば、中心となる物に主に注意を向ける「分析的な知覚傾向」を示す人と、物を取り巻く状況や文脈情報に注意を向ける「包括的な知覚傾向」を示す人とが存在している。しかしながら、こうした知覚傾向は、個々人ごとに完全に固定されたものではなく、それぞれのおかれた社会的・文化的環境の影響を受けて変化していると考えられる。本連携研究プロジェクトでは、人間の知覚傾向がどのような個人的、社会的、文化的要因によって影響を受けているのかを探った。特に、対人関係の中での力関係が知覚傾向にどのような影響を受けるのか、そして、そこに文化差が存在しているかどうかを検証した。

■リーダーは文脈を無視するか?

まずアメリカのウィスコンシン大学で行った実験では、参加者に実験室の中でリーダー、もしくはフォロワーの役割を体験してもらい、その後に参加者の知覚傾向がどう変わるかを検証した。参加者は、リーダー、もしくはフォロワー役にランダムに割り当てられて、コミュニケーション課題に取り組んだ。この課題に取り組むことで、各参加者にリーダーとフォロワーのそれぞれの役割に沿った考え方を喚起した。このコミュニケーション課題が終わった直後に、各参加者に「線と枠課題」とよばれる知覚課題に取り組んでもらった。この線と枠課題は、正方形の枠の中にある線の長さを判断する知覚課題であり、この課題の成績を見ることで、中心的なものに焦点を当てる分析的な知覚と、背景にある文脈情報に注意を払う包括的な知覚とを測定することができる。

この線と枠課題において、リーダー役のアメリカ人は、フォロワー役のアメリカ人よりも、分析的な知覚傾向を示していた。つまり、リーダーになったアメリカ人はフォロワーになったアメリカ人よりも中心にある物にのみ注目して、文脈を無視するようになっていたのである。リーダーとして他者に影響を与えるためには、自分の目標の対象である中心となる事物に注目し、それ以外の周辺的な場や文脈に注意をそらさないことが重要であることが示唆される。

さらに京都大学でも日本人学生を対象に同様の実験を行った。日本での実験を計画した当初は日米で同じ結果になることを予想していた。リーダーにとって分析的であることは文化普遍的に重要であると思われた。しかし、ふたを開けてみると、日本ではアメリカとはまったく異なる結果になった。日本ではリーダー役、フォロワー役にかかわりなく、全体的にみんなが包括的な知覚傾向を示していたのである。むしろ、リーダー役の方がフォロワー役よりもやや包括的であった。つまり、リーダー役になった日本人はフォロワー役になった日本人と同程度か、それ以上に、対象と文脈との関係性に目を向けており、背景にある文脈を無視できなくなっていたのである。

■リーダーのあり方の日米差

当初の予測と異なる日本人の実験結果は、よく考えてみれば非常に納得のいくものであった。結果から考えると、日本において、リーダーとして他者に影響を与えるためには、自らの目標だけでなく、他者の気持ちや関係性といった文脈的な情報にも目を向けないといけないのかもしれない。一方、アメリカにおいては、リーダーとして他者に影響を与えるためには、文脈的な情報に惑わされることなく、自らの目標に注目する必要があるのかもしれない。これは、リーダーシップのあり方が文化によって違うことを示唆する過去の知見とも一致する。

社会心理学者の三隅二不二らによれば、リーダーシップには集団維持と目標達成の両方の機能があり、どの機能が重視されるかは組織や文化の性質によって異なる。アメリカにおいては、リーダーシップの機能として目標達成が一番大切なのに対して、日本においては、リーダーとして目標達成をするためには、関係性に目を向ける集団維持も不可欠だと考えられる。包括的な知覚傾向はそんな集団維持機能を果たす上で役立つのかもしれない。

■今後の展望

本研究から、知覚傾向は対人関係内での役割によって規定され、さらにその規定のされ方は文化によって異なることが示された。この結果から考えると、社会的地位によっても知覚傾向は異なっている可能性が考えられる。そこで現在、この研究をさらに進めて、人間の認知傾向が社会経済的地位によってどのように影響を受けているかを探っているところである。今回の結果が社会経済的地位にもあてはまるとしたら、アメリカにおいては、社会階層が高い人は、低い人に比べて分析的知覚傾向を示すかもしれない。一方、日本においてはそのような関係は見られないかもしれない。このような試みを通して、知覚という非常に基礎的な認知プロセスを、社会・文化的な枠組みの中でとらえていきたいと考えている。

こころの未来研究センター滞在記

ベス・モーリング（フルブライト研究員、デラウェア大学心理学部准教授）
Beth Morling

真夏の京都でこの文章を書いている。私たち家族が昨年2010年８月に到着したときと同じく、蒸し暑い中、蝉の声が響いている。今年７月末までの11カ月間、京都に滞在させていただいた。私はアメリカのデラウェア大学心理学部准教授で、社会・文化心理学を専門としている。サバティカルの機会に、幸運にも日米教育委員会によるフルブライト助成をうけ、京都大学こころの未来研究センターの受け入れにより京都に滞在させていただくことができた。

この１年で研究、教育、家族生活など、さまざまな点において豊かな経験を得ることができた。私の受けたフルブライト助成は「授業・研究」についてのもので、日本で研究プロジェクトを実施するだけではなく、１学期に２コース、これを２学期分教えることになった。研究と教育の両方で、こころの未来研究センターの内田由紀子准教授と共同して行った。

ソーシャル・サポートの日米比較研究

人々は他者から受け取るサポートについてどのように認識しているのか。これが我々の研究テーマである。先行研究（Kim *et al.*, 2008など）では、北米に生きる人々は身近な人たちに明確にサポートを「頼む」ことにより、ストレスに対処する傾向があることが指摘されている。これに対して、アジア人やアジア系のアメリカ人たちは、サポートを依頼することについて、北米のヨーロッパ系に比べると積極的ではないという。さらに実験室において、実験者からの指示によりサポートを他者に求めた場合でも、彼らがそこから得るポジティブな効果は相対的に小さいことが示されている。なぜだろう？

その１つの可能性は、アジアの文化は義務感によって行動が導かれるという原理があるため、人に助けを求めると相手に負担をかけてしまうという懸念が働くことによるものである。これに対して北米文化においては、人々は義務感ではなく自由意志によって動いていると考えられている。したがって、助けを求めることは義務感を相手に与えるものではなく、行動についての１つのサジェスチョンを与えるに過ぎない。

この先行研究に着想を得て、内田准教授と私は２年前に研究をスタートさせた。まず私たちは日本とアメリカの大学生・社会人に、実際に他者から受け取ったサポートの例（たとえば親が自分の仕事や学業に関してアドバイスをくれたときのことなど）を記載してもらった。集められたサポート状況の記述を今度は別のアメリカ人学生たちに読んでもらい、さまざまな判断を行ってもらった。私がセンターに滞在し始めてから、日本人の学生たちにも同じ課題を行ってもらった。オフィスアシスタントによる研究支援や研究に必要な品々を整えてくれたセンターの支援に感謝している。そして何より大切なこととして、センターの研究者仲間たちとの日々の会話から多くのものを得ることができた。彼らの助けによってデータ解析や研究上の疑問などについての考えをクリアにしていくことができた。

我々のデータは２つの興味深い発見を提供してくれた。１つは日本のソーシャル・サポートについてである。日本のサポートはそれが「情緒的」なサポート、つまり、受け取った人が「相手から気にかけられている」と感じることができるようなサポートであるときには、ポジティブな効果を持っていた。それは物品の貸与のような目に見える手助けやアドバイスなどの「問題解決型」のサポートよりも効果的で、受け手によりよい感情を経験させやすかった。

もう１つは、北米でのソーシャル・サポートについてである。アメリカで収集されたサポート状況は、日本のそれとは異なり、情緒的か問題解決型かという区分はさほど問題にならなかった。むしろサポートが「自

教育学研究科国際教育フロンティアのアカデミック・イングリッシュのクラス（前列右から３人目が筆者、その左が内田准教授）

分の依頼した」ものであったかどうか、ということのほうが重要であった。アメリカ人は「頼まなかった」(けれども受け取った) サポートによって、自分をより有能に感じ、サポートについてポジティブに感じ取っていた。彼らは友人や家族が義務感からではなく、自らの意志で自分にサポートを提供してくれたことに意義を見いだすのだろう。

日本での授業

研究をともに進めることに加え、内田准教授とともに2学期間、2つずつの授業を教えた。総合人間学部での「学部特殊講義：こころの科学」で文化心理学を教えた。そして大学院教育学研究科では「国際教育フロンティア」でアカデミック・イングリッシュの授業を担当した。日本でのこれらの授業は「親近」と「新規」の両方の感覚をもたらした。日本の大学での授業は新しい経験であった。まずアメリカでの授業よりも開講頻度が少ない（日本の授業は週1回だが、私のアメリカでのコースでは週に2、3回)。授業に出てくる学生たちは他の授業を多く抱えている（日本では週に10から12の別々の授業をうけるが、アメリカでは1学期に3、4コース)。日本の文化心理学のクラスの学生たちは授業中めったに発言しなかった。それは考えたり、話を聞いたりしているからだということがわかったのは、毎回の授業の最後に提出されるコメントシートからであった。

大学院のアカデミック・イングリッシュの授業は、英語を教えたことのない私にとってまったく新しいものであった。しかしながら、私はここで「親近感」をも感じた。授業は「英語」そのものを教えるというものではなく、研究で用いるような会話、論文執筆、ディスカッションのスキルを教え、国際的なアカデミックの場での成功を目指すものだったからだ。彼らのほとんどは、最初は遠慮がちで慎重だったが、より自信を持ってしっかり自己主張できる英語話者、書き手となっていった。この大学院のクラスは私たちが共通の基盤を持っているからか、しばしば笑いも起こるなど、活気ある雰囲気だった。

一家五人での京都暮らし

この1年のことを語るとき、家族とともに京都で過ごした日々のすばらしい経験を抜きにすることはできないだろう。フルブライトはアメリカ国務省との共同プログラムであり、私たちは「文化大使」として、日本の文化や生活習慣を経験するためにできることを行った。

3人の息子、マックス（10歳)、アレック・ヒューゴ（ともに7歳）はインターナショナルスクールに入校した。そこでは授業は英語で行われるものの、多くの同級生は日本人であり、息子たちはいくつかの日本語を覚えてきた（男の子たちが話したがる言葉を想像してみてほしい！)。息子たちは玄関で靴を脱いできちんとそろえ、外に向け直すことを覚えた。漫画や相撲、テレビを楽しみ、ラーメン、鯛焼き、焼きそば、焼き肉、寿司、京都のすばらしいお豆腐が彼らの新しい好物となった。おばあちゃんたちが彼らのブロンドの髪をなでたり、お箸の使い方がうまいと褒めたりして可愛がってくれる間じっとしていることも覚えた。京都が大きくにぎやかな街でありながら、彼らの歳で安全に地下鉄に1人で乗ることができ、お店にお使いに走っていける街であることも。

数多くの小さな親切についても思い出すことができる。アレックが牛乳を買ってきたときには、レジの人が注意深くおつりとレシートを小さな鞄の中にきちんとまとめてくれていた。ヒューゴの自転車のチェーンが外れたときには、通りすがりの男性が跪き、一瞬でチェーンを元に戻してくれた。近所のおじさんは自転車でスピードを出さないように、車に気をつけるようにと声をかけてくれた……などなど。

双子の息子（アレック、ヒューゴ)、7 歳の誕生日に金閣寺の鐘を鳴らす。長男のマックス、夫のダリン・ポチャン氏とともに

私たちは本州を旅してまわった。それらの場所の多くはこころの未来研究センターの友人たちに勧めてもらったものだ。嵐山、彦根城、福井、信楽、天橋立、鴨川での遊び、大宮交通公園など。数十のお寺を訪れ、大小のお祭りをみてまわった。

また、この1年で京都の現代生活を経験することができた。実に公共交通機関からゴミの分別まで。

終わりに

フルブライトプログラムの1つの目標は、奨励研究者たちが友好関係や共同研究を築き、それによってつながった人々の研究生活や私生活をよりよいものにすることにある。その意味で、このプログラムは成功したといえるだろう。今年出会ったすばらしい友人たちに別れを告げなければならないことには胸が張り裂ける思いである。しかし私たちは互いの国を結ぶ新しい関係を築くことができた。輝ける1年の、その大部分を担ってくれた、こころの未来研究センターの公私にわたるサポートに感謝している。

（翻訳：内田由紀子）

センターの動向（2011年4月〜9月）

●2011年４月22日　第６回わく・湧く・ワークショップ「イメージワークとメディテーションの夕べ」（於：京都大学稲盛財団記念館３階小会議室２）。

●４月27日　「東日本大震災とこころの未来」サイト開設。

●５月16日　第１回こころ観研究会・ワザ学研究会合同研究会（於：京都大学稲盛財団記念館３階小会議室２）。話題提供：井上ウィマラ先生（高野山大学准教授）「テーラワーダ仏教におけるこころ観とこころを抑制するワザについて」、熊谷誠慈先生（京都大学白眉プロジェクト助教）「チベット仏教におけるこころ観とこころを抑制するワザについて」、指定討論者：魚川祐司先生（ミャンマー・テーラワーダ仏教僧侶）。

●５月18日　第15回注意研究会（於：京都大学吉田南総合館１階101演習室）。話題提供：Professor Alan C. Kamil,Department of Psychology, University of Nebraska-Lincoln, USA（京都大学大学院文学研究科 Visiting Professor）。

●５月31日　映画「扉のむこう」の上映会ならびに「ひきこもり」に関するパネルディスカッション（於：京都大学稲盛財団記念館３階大会議室）。パネリスト：ローレンス・スラッシュ先生（本編映画監督）、ビナイ・ノラサクンキット先生（ミネソタ州立大学・文化心理学）、トゥーッカ・トイボネン先生（オックスフォード大学・社会学）、境泉洋先生（徳島大学・臨床心理学）。進行：内田由紀子准教授。

●６月21日　連携研究プロジェクト「東日本大震災関連プロジェクト」立ち上げ。

●６月28日　「文化・自己・対人関係のワークショップ－Workshop on Culture, Self, and Social Relationships－」（於：京都大学稲盛財団記念館３階大会議室）。講演者：Steven J. Heine先生（ブリティッシュ・コロンビア大学）、演題：“Positive Self-Views, East and West”、講演者：Vinai Norasakkunkit先生（ミネソタ州立大学・京都大学こころの未来研究センター外国人特別研究員）、演題：“Unpackaging Cultural Differences in Social Anxiety: The Role of Self-Construal,Self-Enhancement, and Holistic Cognition”、講演者：竹村幸祐研究員、演題：“Being Different Leads to Being Connected: On the Adaptive Function of Uniqueness in ‘Open’ Societies”、講演者：Beth Morling先生（デラウェア大学・京都大学こころの未来研究センターフルブライト研究員）、演題：“How Does Social Support Feel? It Depends on Who You Ask”。指定討論：内田由紀子准教授。

●７月１日　京都大学附置研究所・センター主催の第14回品川セミナー（於：京都大学東京オフィス）で吉川センター長が講演。タイトル：「ゆっくり話を聴く」ということ：臨床対話の認知科学。

●７月５日〜13日　吉川センター長が京大―ブータン友好プログラム第５次訪問団の団長としてブータン王国に出張。

●７月20日　第７回わく・湧く・ワークショップ「イメージワークとメディテーションの夕べ」（於：京都大学稲盛財団記念館３階小会議室１）。

●７月20日　「京都大学シンポジウムシリーズIV：宗教と災害〜東日本大震災の現場からの報告と討議」（於：京都大学稲盛財団記念館３階大会議室）。第１部　基調報告：島薗進先生（東京大学教授）「『宗教者災害支援連絡会・情報交換会』の活動と課題」、玄侑宗久先生（福島県三春僧侶・作家）「福島県での被災状況と被災地支援の現状および復興構想会議の問題点」。事例報告：稲葉圭信先生（大阪大学准教授）「『宗教者災害救援ネットワーク』の活動と課題」、金子昭先生（天理大学教授）「新宗教の災害支援活動の事例と課題」。第２部　指定討論者：河合俊雄教授、内田由紀子准教授。

●７月26日　第34回こころの未来セミナー（於：京都大学稲盛財団記念館３階大会議室）。講師：Darcy Harris先生（ウェスタン・オンタリオ大学キングスカレッジ「死の研究」プログラム教授、看護師・臨床心理士〈死別カウンセリング〉）、タイトル：悲嘆へのさまざまな道のり。

●７月28日　第２回こころ観研究会・ワザ学研究会・負の感情研究会合同研究会（於：京都大学東南アジア研究所東棟１階会議室107）。話題提供：濱野清志先生（京都文教大学教授）、永澤哲先生（京都文教大学准教授）、井上ウィマラ先生（高野山大学准教授）、熊谷誠慈先生（京都大学白眉プロジェクト助教）。

●８月20日　「こころの未来研究センター　夏の研究ワークショップ」（於：京都大学稲盛財団記念館３階大会議室）。発表者：上田祥行研究員「快刺激がヒトの視覚的注意に関わる処理に及ぼす影響」、山本哲也研究員「レチノトピーに基づいた高次視覚野の同定：大きな受容野サイズにどう立ち向かうのか？」、長岡千賀研究員「カウンセリング対話における発話理解の認知的枠組み」、竹村幸祐研究員「社会生態学的環境に依存する個人主義的傾向の社会的適応価：関係流動性と独自性欲求のケース」、内田由紀子准教授「文化の中心と周辺：対人関係の視点から」、森崎礼子助教「コミュニケーションの比較認知・障害児発達研究」、平石界助教「社会性の進化と行動遺伝学：双生児による公共財ゲーム実験から」。コメンテーター：カリフォルニア工科大学下條信輔教授。

●８月21日　第10回こころの広場「進化とこころ〜『こころ』も進化した？」（於：京都大学百周年時計台記念館２階国際交流ホールⅠ・Ⅱ）。第１部　「ヒトの進化：遺伝子、からだ、こころ」、講師：長谷川眞理子先生（総合研究大学院大学先導科学研究科教授・人間行動進化学）。第２部　「知覚と進化〜世界はなぜこのように立ち現れるのか？」、講師：下條信輔先生（カリフォルニア工科大学生物学部教授・認知神経科学・知覚心理学）。第３部　座談・質疑応答「進化とこころ」。司会進行：平石界助教。

●９月７日　第８回わく・湧く・ワークショップ「イメージワークとメディテーションの夕べ」（於：京都大学稲盛財団記念館３階小会議室１）。